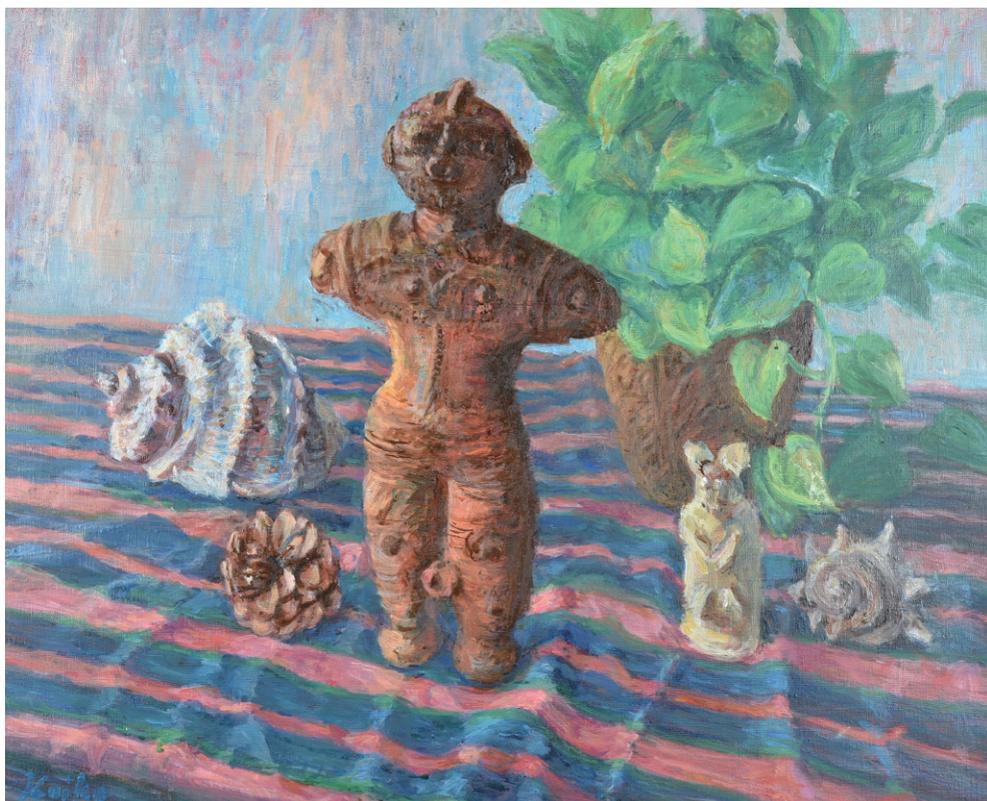


俳句雜誌

令和七年十一月一日發行（每月一日發行）通卷第九十八卷第十一号

水 明

2025 11月号



《今月のかな女》

願ひ事なくて手児奈の秋淋し

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

この俳句は、大むかし下総国葛飾郡真間(現・千葉県市川市真間)の里に居たと言われている伝説上の美女「手児奈」に因んだもので、この伝説は万葉集にも詠まれている。七三七年の創建と伝えられている「手児奈霊神堂」には、今も子授け祈願・安産祈願・良縁祈願などのお参りに多くの人が訪れる。当時かな女もここを訪れたのであろう。その日は、少し冷たい秋風が吹いていたのであろうか、これと言つて特別な願ひ事の無い自分の身に一抹の淋しさを覚えたのであろう。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

落日へ散華里山のかなかな

松井由紀子

季音月

夏草や嘗てこの地に大本堂

日高道を

季音花

晩照の島へと泳ぎゆく少年

保坂翔太

水明集

手放せぬ本を手厚く曝書せり

丸屋詠子

鼓笛集

日捲りの薄さに気付き秋めきぬ

岡田宣子

山紫集

螳螂も少年もすぐ身構へる

内田恵子

水 明

令和 7 年
11 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

奥なるひと(作品)

舞 姫(近詠)

秋 の 汐(近詠)

百尺竿頭※主宰作品の鑑賞

ゆずり葉※季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

全国大会の記

全国大会入選句

俳誌望見

山本鬼之介

椎野美代子

森川義子

五明 昇

檜鼻ことは

松井由紀子
森川義子
茂木和子
ほか

日高道を
梅澤佐江
正木萬蝶
ほか

保坂翔太
下川光子
横山君夫
ほか

網野月を

浦川聡子

青木鶴城

梅澤輝翠

1

4

6

7

8

10

12

18

23

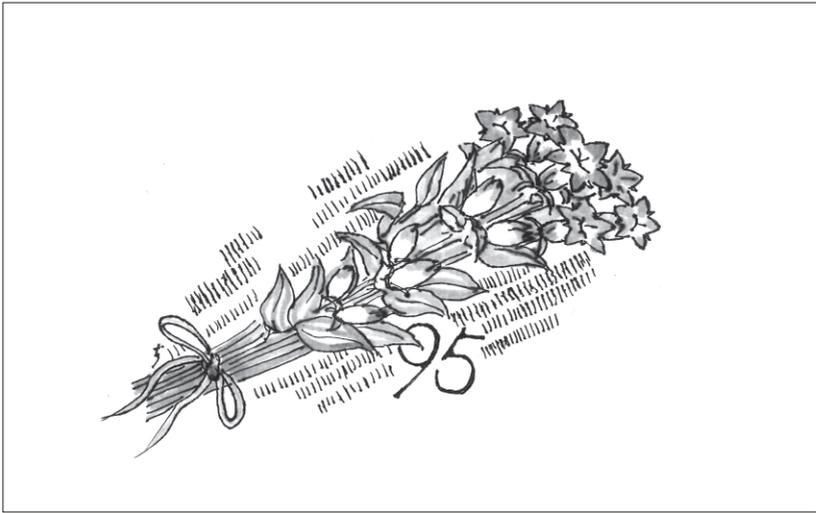
28

30

32

38

31



新季音同人 私の二句

新同人紹介

水明集

丸屋詠子
倉田星歩
小林京子
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

68

水琴窟 (水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

72

句集喝采

菅原卓郎

74

鼓笛集

76

山紫集

80

水明の記事他誌より転載

79

水明例会報・各地句会報

86
88

水明塾のお知らせ

93

水明誌代・発展基金のお願い

94

発展基金御礼・風声

95

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

奥なるひと

山本鬼之介

秋
淋
し
腹
話
術
師
の
独
り
言

秋
の
灯
や
絵
蠟
燭
に
も
秋
の
灯
を

薯
蕷
汁
わ
が
家
系
図
に
謎
の
人

その奥にかな女居さうな秋簾
伊賀めぐり今宵根来の濁り酒
祝宴の椅子の軋みや秋の声
頬杖の視線を止むる蜂屋柿
修しゆ学院離宮のもみぢ苔に和し

舞 姫

椎 野 美代子

稲 田 いま 大地 の 色 を 塗 り 替 へ て
稲 実 る 黄 金 の 波 濤 現 は る る
舞 姫 は 白 鷺 稲 田 日 本 晴
稲 田 原 パ ッ チ ワ ー ク の グ ラ デ ー シ ョ ン
畦 道 の 華 ぞ 華 華 秋 日 傘
「 文 明 堂 」 傍 へ カ ス テ ラ 色 の 稲
稲 田 暮 る 地 霊 の 息 吹 四 方 に 満 つ

自宅より車で十分足らずの「さいたま市民医療センター」へ腰痛のため思いがけず二週間入院。
武甲山、富士山、明らかな裾野は満目の稲田原刈入れまでの日時をおしみなく堪能。

秋の汐

森川義子

フエリーゆく水尾の白さや秋の汐
天守にも瀬戸の潮の香夕月夜
夕風や陸くがの灯りのぼつぼつと
紺碧の海に迫り出す花芒
瀬戸内の風の明るき蜜柑山
満目の実りの幸の青みかん
終の地と決めしこの町星月夜

数年前傘寿の賀に高校時代からの友人四人で久し振りに金毘羅宮に参拝した。
一三六八段の磴道に足腰を宥めながら、やっと社に到着した。その時の友の笑顔が目に浮かぶ。展望台より見下ろす讃岐平野に点在する多くの溜池がきらきらと輝く。また線路に沿って左は瀬戸内海、右には急斜面の蜜柑山が続く。そんな境界線予讃線の列車が走る。
遠き日の懐かしい故郷の思い出である。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

七月号

水亭や江差追分切せつと

江差追分は、北海道江差町に伝わる民謡で、その歴史は江戸時代に溯る。ルーツは信州の馬子唄や越後の船歌にあるとされ、北前船によって江差に伝えられ、地元文化や人々の生活と結びついて独自の発展を遂げた。その哀切な節回しやメロディは、「一度聞いて惚れ、二度聞いて酔い、三度聞いて涙する」と言われるほどで、人々の心を捉えて離さない。

葉桜や花街へ至る蹺

花街とは、芸妓や舞妓などが歌や踊り、三味線などの芸を披露したり、お座敷遊びをしたりする街のことで、特に京都の祇園、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東などが有名である。中でも祇園の白川南通りは、芸妓や舞妓が行き交う石畳の道を朱色の玉垣が彩る京都風情満点のエリアで、爽やかな葉桜と相俟って絶好の撮影スポットとなっている。

風韻や門跡寺の青楓

門跡寺院は天皇や皇族、摂家が住職を務める寺院のことで、

高い格式を持ち、皇室との関わりが深い。掲句から想起されるのは、天台宗三門跡の一つである青蓮院門跡。風韻に満ちた粟田御所の佇まいはもとより、相阿弥、小堀遠州、七代目小川治兵衛と、各時代の作庭家の手になる名園に青々と茂る新緑のカエデの美しさは外に類を見ない。

梅雨雲や頬杖様になる窓辺

頬杖とは、肘をつけて手のひらや拳で顔（主に顎や頬）を支える仕草のことである。頬杖は人が考え事や物思いにふける時、退屈な時、眠気や疲労を感じている時など、さまざまな心理状態を表すことがある。梅雨の時期は雲が低くたれ込めてどんよりした空模様になることが多く、窓辺に頬杖をついたポーズが、うっとおしく憂鬱な心情をよく表している。

黒南風を大漁節が迎へ撃つ

大漁節は、日本全国の沿岸各地で大漁のとき歌われる民謡で、「大漁歌」とも言われる。大漁の喜びを表現するだけでなく、豊漁を願う気持ちも込められており、最も代表的なのが千葉県銚子市の民謡「銚子大漁節」である。黒南風は梅雨時に吹く雨雲を伴った湿った南風だが、陰鬱な天候を衝いて勇ましく出漁する漁船団を大漁節に重ねた雄渾な一句だ。

八月号

提督の肖像巖と夏館

「提督の肖像」の措辞からまず、歴史上の人物であるペリー提督の肖像画が想起される。ペリーは米国海軍の提督で、一八五三年に日本へ来航し日米和親条約締結に貢献した。艦隊に随行していたドイツ人画家ハイネが描いた石版彩色の肖像画が広島県立歴史博物館に収蔵されており、その威厳ある立姿はあたりを圧している。森閑とした洋館には自信に満ちた提督の靴音が響くようだ。

姫垣を慕うてきたか蝸牛

姫垣の「ひめ」は「ひめゆり」などと同じく、小さい状態を表す接頭語で、姫垣は宮殿や城の上などに作る丈の低い垣根を表す。朝鮮出兵に赴く細川忠興が夫人のガラシャに「なびくなよわが姫垣の女郎花男山より風は吹くとも」（愛する妻よ秀吉に誘惑に負けるなよ）の歌を送ったのは有名な話。今、その姫垣を一匹の蝸牛が這い登っている。「姫垣のうちがは温し秋時雨」（小澤克己）の句を彷彿とさせる一句だ。

ソプラノの歌に全開水中花

水中花は、花瓶やコップの水の中に造花や作り物の金魚、鳥などを入れて開かせて楽しむもの。江戸時代に中国から伝

わり、当初は酒の席の遊びとして杯に浮べて楽しんでたため、「水中花」「杯中花」の呼び名もある。コンサートホールから洩れ聞こえるソプラノの歌声にホワイエに並べられた水中花が一斉に花開く様はまさに圧巻。涼しさを感じさせる夏の風物詩として、水中花にはたまらない魅力がある。

番町のとある画廊の夏灯

番町は、東京都千代田区西部に位置する地名で、一番町から六番町までのエリアを指す。江戸時代には武家屋敷が立ち並び、現在でも高級住宅地として知られている。歴史的背景や治安、交通、教育、生活環境の良さから、都心の一等地として富裕層の人気が高く、これを当て込んだ画廊も多いがその一軒から灯りが洩れている。夏の暑い一日が終わり、番町界隈にほっとする涼しさが漂い始める一時だ。

むかし此処らは「お玉が池」よ夏の暮

東京都千代田区岩本町には、古くから上野・不忍池より大きな池があり「桜が池」と呼ばれていた。この地のお玉という娘に人柄も容姿も同じような男二人が心を通わせ、悩んだお玉は池に身を投じたという。この話からこの池を「お玉が池」と呼ぶようになり、池のあった場所には「繁栄お玉稲荷神社」が現存する。あたりは江戸の学問の中心地で、東京大学医学部の前身である種痘所の記念碑も立っている。

ゆずり葉

◆季音八月

檜鼻 ことは

久々の友に君付け心太 小倉 倭子

お互いを「君」づけで呼び合うことを提唱したのは吉田松陰。元々は立場の高い人を呼ぶ時に使っていた「君」には相手に対する敬意が込められていて、君付けで呼び合う事で松下村塾の塾生たちがお互いを対等に扱うとすることを試みたということでした。また、夏目漱石の「坊っちゃん」に友人を君付けで呼ぶ場面が登場し、対等で親密な仲間意識を表す新しい時代の言葉として「君」が、全国的に広がっていったと伺いました。

そう言えば、「君」付けで呼んでくれる友もいたし、「さん」付けで呼んでくれる友もいたなあと学生時代のころを思い出しました。作者は、長く会わなかった学生時代の旧友に顔を合わせ、その場でふと、その頃呼んでいたように「君」と声をかけられたのでしょうか。この句が魅力的なのは、懐かしい友との再会の喜びを、「君」と「心太」で読者に想像させて

いる点です。距離が縮まったような、そうでないような微妙な距離感と再会の嬉しさがほのほのと伝わってきました。

水たまりばかり歩く子梅雨晴間 大塚 茂子

梅雨の合間に顔を出した青空。昨日の雨が残した水たまりが点々と広がっています。小学生でしょうか、保育園児でしょうか、次々に水たまりに足を踏み入れてとつても楽しそう。そのような光景が鮮やかに浮かんできます。大人になった私たちなら、当然のように避ける水たまりは、子どもたちにとつてはおおらかな遊びの場となります。子どもたちの笑顔が晴れ間の明るさと調和し、子どもたちの喜びが弾ける動画面を見ているようです。

ああっそうだったな、理由もなく楽しく確かそんなことをしたなあと、子どもの頃の記憶がふつふつと甦ってきて、楽しく読ませていただきました。いい歳になって、孫や子どもたちが、水たまりばかり選んでバシャバシャと歩くのを見る

と、つつい、止めたくなることもあるのですが、ここはやはり、静かに見守ることにいたしましたしょう。

粹筋のをみな三代更衣 染谷風子

着物の世界では「粹ですな」という言葉は、粹筋(花柳界)の人に言う場合が多いのだそうです。さて、若狭の小都市小浜の西の外れに三丁町と呼ばれる茶屋町がありました。今でも、狭い路地、ベンガラ格子や出格子の家が軒を連ね、落ち着いた雰囲気の中に当時の面影を感じる事ができます。最盛期には四十八軒のお茶屋さんがあったそうですが、現在営業されている料亭は「播磨」の一軒のみとなりました。母、子、孫の女三代で茶屋町の文化を伝えつつ営業を続けていらつしやいます。このこととイメージを重ねながら句を拝読しました。句は、「粹筋」をみな三代「更衣」という言葉を紡ぎ、花街の三世代の女性たちが、初夏の更衣という行為を通じ、花街に受け継がれていく文化の流れを映し出すように詠まれた句、「播磨」さんにお伝えしたい一句です。

黒南風や宿の帳場に船筆筒 菅原卓郎

北前船は江戸時代の中頃から明治三十年代まで、日本海回りで北海道と大阪を往復しながら商いを行っていた商船の総称です。危険な航海ながらも船主たちは繁栄を極めたようです。

数年前、明治期に五大船主として名を馳せた右近権左衛門の館を訪れ、船筆筒の実物を拝見する機会がありました。船筆筒は、堅牢で水に強く、難破しても浮くように造られていて貴重品を保管する金庫の役割を果たしていました。北前船の航海にはなくてはならぬ物であったようです。

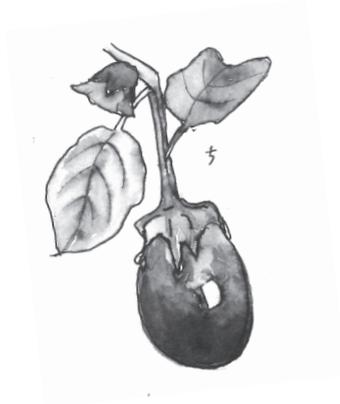
梅雨入り前、作者は港町にある老舗の宿を訪れたのでしよう。帳場の奥には船筆筒が鎮座し、艶やかに黒光りする木目は美しく、老舗の宿の帳場に相応しい調度品となっています。黒南風と船筆筒という二つの対照から、当日の景色、宿屋の質感をその場にいるように感じることができ、時間が止まったような旅情を味あわせていただきました。

三尺寝夢の途中の宅急便 新 曆文

夏の午後、心地よく昼寝に落ち入り夢の中では何やら楽しいことが進行しています。そんなところに「ピンポン！」といういきなりのチャイム。否応なく、強制的に現実世界に引き戻され、楽しい昼寝は中断、そのような日常の一瞬がユームラス、かつ生活感たっぷり描かれています。

古典的な季語「三尺寝」と現代的なモチーフ「宅急便」を組み合わせ風雅な世界と日常のリアルを融合、心地よい昼寝から目覚める一瞬を見事に詠まれています。楽しく拝読いたしました。まさに身に覚えありの一句です。

季音雪



無花果 松井由紀子

来し方をたぐりたぐりて終ふ葉月
山住みの友が告げくる秋の風
落日へ散華里山のかなかな
無花果の固き口もと朝の市
猛き陽や字画のかすむ秋の季語

終戦日 茂木和子

太陽は終日眞上蟬時雨
黙禱の目頭あつし終戦日
語り部は時の凝視者原爆忌
休校の校舎燃えさう大西日
大西日拉げし声で啼く鴉

鳳仙花 森川義子

秋まつり 山中みどり

寺井汲む隅ずみまでも鳳仙花
遙拝の大文字の火や京の旅
希に見る月下美人の開く刻
裏木戸に今日も居据る青蜥蜴
欄干より競ふ男の子のダイビング

握る掌の冷えゆく記憶白木槿
伴天の遺影に代へて秋祭
組み上る祭櫓に秋茜
夕風に秋の気配や祭笛
ひとり飲むワイン皆既の月の色

燈籠 森本早苗

八月の影 網野月を

物言ひたげな燈籠五千合掌す
星祭りためらはず書く「逢ひたし」と
織姫となりて逢ひたき人のあり
盆僧の猫に挨拶して座る
終戦日父の背中忍び泣く

翡翠の影落つ池の中の鳥
翡翠を見るうち身体かたくして
昼顔の咲きて人為を欲しいまま
一様に竹林撓ふ野分の来
八月や空見上ぐれば涙でる

そぞろ歩き

石井喜恵

ひたひたと

石山かつ子

土用あい波の攫ひし砂の城
土用あい鎖骨くすぐるネックレス
夏草美しそぞろ歩きの女坂
夏草や両手に掬ふ沢の水
帆船の風待つ沖や今朝の秋

貧乏葛風に触手がさぐりをり
農小屋を端から攻むるやぶからし
生くるにも少しの技術秋暑し
青嵐振つて音せぬマツチ箱
ひたひたと橋桁洗ふ初嵐

盆 供 養 井 上 燈 女

菊 の 酒 大 橋 廸 代

吾が病めば長子が仕切る盆供養
迎火や子の目に父のもどり来る
読経の中へ中へと鉦叩
盆客の帰りし後の疲れかな
送り盆終えて遠のく夫なりし

白蟻へ細身大工が目を凝らす
卒寿かな殖やす白蟻・木食ひ虫
リフォームのはじめ白蟻退治かな
帰省子や柱にしるす子の背丈
なみなみと瑠璃の切子へ菊の酒

萩の風 大村節代

手を振れば会釈する人萩の風
指先に萩の風受け一万歩
背中より老いゆく人や萩の風
葉隠れに余命いたはる秋の蝶
終ひ風呂守宮の恋は硝子越

夏 館 菊池ひろこ

避暑先の百味箏笛にくる地震
空耳の鳥声も良し夏館
夏館鍵穴錆びし中二館
補聴器へ風音となる土用干
土用干書庫の小鍵をまづ探す

秋さる 五明昇

秋の蝶潮流速き壇ノ浦
萩の声紋次郎めく一人旅
蛸や灯して暗き妻籠宿
秩父路にコスモスの乱止み難し
かくれんぼ白粉花が揺れてるよ

手捻りの 境 延昭

手捻りの鉢のいびつや今朝の秋
初あらし地下鉄にある地上駅
油浮く残暑の午後の船溜り
山の湯の暮るるは捷しかなかな
篤農はすでに死語なり藪枯らし

天上の供華 椎野美代子

山百合の香 鈴木康世

百日紅雲呼び風も翅までも
百日紅ま昼のシャワー弾けとぶ
百日紅見ざる聞かざる語らざる
百日紅人は哀しき尾をもてり
天上の供華へと百日紅旺ん

裏山を統べ山百合の匂ひたつ
己が背に滲む歳月百日紅
月見草昏きを待たずつぼみ解く
警報に揺れのとまらぬ夾竹桃
蒲の穂や沼の澱みて動かざる

天の川 島津初花

土用波 十倉和子

故里へ銀河の傾ぐ午前二時
板張りの廊下に映る天の川
終電の尾灯は銀河へ吸はれゆく
山の日や家号印の鎌を磨ぐ
線状降水帯の真ん中で盆用意

磯そなれまつ馴松なれまつそろふお台場土用波
土用波子を抱く眼鏡さらひゆく
おむすびに砂が飛びつく土用東風
磯蟹の怒り歩きや遭難碑
ゆきずりの地引網ひき夏終る

帰郷 鳥羽和風

麦めし 星野和葉

稲の秋一本足で立つポスト
首下げ共に悦べ豊の秋
帰郷して母に添る寝の良夜かな
湧き水にしろがね浮かす毛桃かな
白桃や赤子に産毛の初初し

電柱の影も貴重よ大西日
麦とろを食みて戦後の麦めしを
卵入りのすいとん作る終戦日
研ぎ水を残暑の庭に撒きちらす
影拾ひ行く残暑の街のベビーカー

白百日紅 永野史代

犬の耳 町野広子

かたつむり海恋しくて首伸ばす
古里の朽ちし表札かたつむり
白百日紅行きより帰り胸にしむ
樹木葬・花壇葬・循環葬・送り火
送り火やにはかに風の立ちにけり

遠雷をはや捉へたる犬の耳
雷鳴もリズムとばかり歌ふ彼奴
寝冷え子のぐづくぐづくる日がなかな
久しきは物売りの声土用あい
土用あい門からのぼる子等の声

季音月

白昼夢

日高道を

大佛の黴に香りのあるごとし
扁額に嘗ての栄華 夏館
夏草や嘗てこの地に大本営
夏の空前世の君にあへさうな
白昼の瞬間移動 蝸牛

泥大島

正木萬蝶

遠近に鳴る光る降るはたた神
孤独死といへど焚かるる門火かな
送り火や煙の形に父と母
雲海や雌岳は淡き化粧して
風入れて泥大島の媚態かな

醉芙蓉の夕べ

梅澤佐江

歳月を慈しみつつ虫干す
秋の初風篋の気を調へり
大文字果てし余情や古都の闇
水音の清しき朝白芙蓉
恋唄に咽ぶ胡弓や醉芙蓉

夜の秋

大場順子

西日浴びのがるる術のなきポスト
看護士の言葉に癒ゆる夜の秋
雲海や馬の背越えをゆく行者
雲海の底に神話の岩戸座し
転生も君に添はむと踊り抜く

盆の月

松宮保人

二輪車の二人が同じ水菓子
原色のビーチパラソル花開く
そのままを湖に映せし盆の月
佇みて墓碑と語るや盆の月
一服の午後の翳りや桐一葉

虫 干 丸山 マスミ

沖見ゆる茶房を抜くる土用あい
城跡に異界の気配大西日
虫干や秘仏も今日は端近に
曝書せしかな女全集付箋多
磯波の時には高し秋立つ日

野の花 河野 はるみ

そよ風に萩を遊ばす翁像
母の忌に供ふる一枝白桔梗
撫子よ今が青春吾も青春
藤袴今ひとたびの紅すこし
竜胆やりんだうの君背まろし

帰 巢 曲淵 徹雄

夕焼を潜りて帰る伝書鳩
床涼み舞子が翳す東山
雷鳴や積まれ苔むす無縁塚
祭器庫へ戻りたがらぬ神輿かな
秋風や赤き格子を摩る垂

蟬時雨 石川 理恵

外つ国の姫となりしよ昼寝覚
抱くといふより添ひ寝めく竹婦人
雲海に溺れさうなる夜明けかな
巻頭の姉弟子の句の涼しかりけり
異国には今も戦火や蟬時雨

蔵の街 荒井 俱子

まくしたて残暑を煽る街宣車
カンフル剤がほしき地球や秋暑し
うすれゆく母の面影夕化粧
処暑すぎぬ影が濃くなる蔵の街
結願の秋の遍路に夕日濃し

花 野 大塚 茂子

佐渡の丘花野のさきに遊女塚
手をつなぎ歩幅ゆるみて花野路
田んぼアート畦走る児と馬追と
足速し兄と馬追勝負する
花野来て草の匂ひの母の背

暑き日 檜鼻ことは

水色の葉をはさむ小暑かな
なんとこのう箸の重たき朝曇
風死すやくねくね曲がる象の鼻
初蟬や納戸の奥の玩具箱
懐かしき話をしたり処暑の客

花野 原田秀子

榛名富士借景にして大花野
連れ立ちてゆるり散歩や花野道
出し汁は夫の裁量とろろ汁
秋初め湖畔に白き舫ひ船
トテ馬車も湖畔に憩ふ秋初め

よみがへる 青木鶴城

水団の味は変はらず終戦日
風入れや若き血潮のよみがへる
鉢巻きと締め込みきりり秋祭
禪を組み瞑目すれば秋の蟬
星月夜悲喜こもごもを灯しをり

四方山話 池田雅夫

焮の夕真つ赤に染まる水車
歩を合はせそりりそりりと花野道
秋声に鳥語喃語の入りまじり
興に入る 四方山話ちちろ虫
しんしんと露の結べる家路かな

ろくでなし 近藤徹平

チーママが髪にジャスミン「ろくでなし」
大西日金波に浮かぶ佐渡島
古希今や山車の先導尻端折り
しぶきを飛ばす小便小僧初嵐
夏季講座高橋阿伝一代記

宇宙誕生 内田恵子

謎多き宇宙誕生秋に入る
かなかなの鳴きやみ森の昏くなり
記録より記憶の愛しかなかな
かさこそと駄菓子子の袋終戦日
独り居の門限はなし守宮這ふ

手 花 火 上 戸 千 津 子

手花火の閃光に浮く子の笑顔
裏木戸を微かに通る秋の使者
丹波路に稲穂出し初む風軽し
藁葺に似合ふ木槿や童唄
故里も今父ははを茄子の馬

方 位 盤 野 口 和 子

山の日や上毛三山方位盤
山肌の光艶めき涼新た
もてなしは高原からのもろこしで
喜雨のなか犬の寝言の深眠り
立秋やクラシック音楽入門書

天 の 川 飛 永 鼓

燃ゆるものとうに忘れむ花石榴
ありがたうと素直に言うて天の川
瞬もせず見上げをり天の川
露天風呂に居ること忘れ天の川
桐一葉村に空家のまたひとつ

天 網 界 原 田 自 然

飛行士の青き星見る銀河の夜
銀河の夜予約出来たよ小さき星に
無重力となりし己が身銀河の夜
銀河の夜玉を磨けと母の声
父母おはす星はあの星銀河の夜

押 し 花 福 田 千 春

虫干や改訂前の辞書に花
雷さまの今日もお出まし故郷は
迅雷や寺の楠真つ二つ
焙烙に父母の名残や魂送り
送り火をまたの逢瀬のために焚く

芭 蕉 熊 倉 千 重 子

深川庵に残る矢立よ照芭蕉
ねぢれ解き水色淡き牽牛花
省略を効かせすつきり吾亦紅
吾亦紅口バ引く牧の馬車の音
今日処暑の朝の菜園声弾み

浄玻璃の鏡

松島寛久

老いたれば流れのままに処暑の雲
パラソルにいかした女小麦色
水菓子の旗ゆれ小浜に雲城水
聞き覚えの声する駅や盆の月
浄玻璃の鏡に過去も盆の月

蟬時雨

川崎道子

蜘蛛の囿に早朝出勤捕はるる
朝寝して雨戸を繰れば蟬時雨
蟬時雨有線放送聞きとれず
長靴を履いて手火花幼き子
秋暑しボトルシップは何時出航

夕立

松山清子

片陰をひろひつつ行くポストまで
街騒の遠のく気配夕立くる
独り言多きこの頃夜の蟬
夾竹桃街路樹となり海に添ふ
貴船川氾濫とかや夏猛る

盆踊り

瀬戸雄二郎

盆踊余技には見えぬ部長の手
はぐれたる妻が踊の輪の中に
踊の輪も小さくなりて故郷よ
踊の輪ぱつたり会ひし古き友
西瓜切る賞罰無しで八十年

揚花火

田中章嘉

両岸で今か今かと揚花火
いかづちを遠くに聞いて揚花火
蓮の実の跳べば再び池の中
草の花摘むは幼子細き指
草野球蝸鳴いて終りけり

季音花

晩照の島へ

保坂翔太

白南風や灯台よぎる定期船
晩照の島へと泳ぎゆく少年
伊達女となりし番長山車を引く
ひぐらしの声降りそそぎ村暮るる
煩惱を希釈するなり秋の川

絵蠟燭

横山君夫

秋風や絵の削れゆく絵蠟燭
遺品展観て秋風と帰りけり
夜もすがら踊りて任地離れけり
秋灯下森鷗外を三冊目
過疎の村お盆を迎へ膨れけり

秋の立つ

下川光子

立秋や木々ざわざわと風生る
空高く雲高くなり秋の立つ
蝸のこゑ遠くなりさやうなら
かなかなと社の鈴緒引きたれば
秋暑しポケット重き歩数計

秋 旱

笹本啓子

黴匂ふ民話の里の蔵座敷
湯上がりの火照り冷ませし夕端居
いつの間に独りとなりし夕端居
梅干を単身赴任の荷の中に
秋旱ダム湖の鳥居見え隠れ

ねぶた祭

渋谷きいち

ひげ剃りのあと青青と今朝の秋
佞武多に灯目力ぐつと武者絵かな
跳ねたれば街も跳ねたる佞武多の夜
未来へ力跳人津軽の自慢なり
朝顔や鳴らぬラツパの蓄音機

焼跡闇市派

染谷 風子

願はくは粉黛ここへ納涼床
鴨川に映る雪洞床涼み
かにかくに脂粉のこひし川床涼み
花合歡や秋田おぼこの富士額
サングラスかつて焼跡闇市派

夏あれこれ

石田 慶子

月見草盛り塩の横灯のともし
虫干や昔商家の印半纏
ビヤガーデンあればよかつた喉仏
送り火や「お気をつけて」と娘言ふ
ちやぶだいにとうもろこしと絵日記と

秋 真 近

菅 原 卓 郎

お囃子になびく後れ毛辻踊
曠野ゆく鉄路のたうつ日の盛
初嵐よする汀の捨て小舟
産土のさわぐ瑞垣初嵐
水攻めに耐へし古墨や藪からし

五十八年

新 曆 文

創業からの五十八年法師蟬
ねぶた舞ふ旅の一夜の余韻かな
偕老や遂にねぶたの夜と逢ふ
素泊の宿に一輪牽牛花
駆け回る牧の栗毛や今朝の秋

風の抜け道

越 田 栄 子

ジャスマインの風の抜け道カフェテラス
茉莉花に触れたし君の白き指
サングラスかけたなら無敵おませな子
決別の涙を隠すサングラス
悠久を緋く地層土用波

命つなぎて

梅 澤 輝 翠

貴船川床輪島の椀に締め汁
盃を単孤の我や新酒酌む
母恋し子牛のまなこ天の川
腹さかれ命つなぎて鮭の雌
姉さまの婚がととのひ天の川

送り火 鈴木玲子

雷鳴に急ぎ立てられて人の波
パソコンの警告音や遠き雷
生きにくくなりし世なれど蝸牛
おりん鳴らしてまた鳴らす子や迎へ盆
送り火の消えて暫しの静寂かな

秋のひでり 西幅公子

秋ひでり老農畦に立ち尽くす
銀漢の雄姿に少女夢いだく
失せさうな鋤形虫に西瓜かな
秋ひでり老農の手に枇の穂
沼を飛ぶ旅立まぢか秋燕

秋立つ日 宮崎チアキ

眩しきや西日に染まる信号機
成り立たぬ言の葉つらぬ熱帯夜
思ひやりが人たる証藪枯らし
爽爽と竹林均らす処暑の風
淡淡と取り組む課題秋立つ日

立秋 葛城千世子

大砂走り転がる襷霧の富士
出勤の時間早める秋の雲
弁当に黒一白二の葡萄粒
秋初め米増産のどうなるや
立秋や御供への桃ゼリー着く

終戦八十年 高橋満耶子

鯛や原爆偲ぶ八十年
終戦日テレビに合せ黙祷す
秋暑し延長戦のドラマかな
墓参りの代行業や大はやり
送迎車の時間びつたり日日草

朝茶の稽古 野村美子

道端に錆びし空き缶藪枯らし
草野球空地の塀の藪枯らし
騒騒と氷川の杜や初嵐
秋旱地割れが続く川の底
白木槿朝茶の稽古和やかに

待ちわびる秋

寺内洋子

さるすべり百日目のまだ来ぬらしく
耳そば立て秋の足音待ちをりし
ヘアロスの頭頂に厳し残暑かな
九月来と言ひきかせをり天道に
秋の気配わづか忍ばせ風過ぎる

星月夜

山戸美子

カラフルなテントも眠る星月夜
妻の許可貰ひて集ふ星月夜
災害の寸断路にも星月夜
露天風呂水面煌めく星月夜
星月夜なぜ争ひは続くのか

秋遍路

森和子

早立ちのナナハン吹かし秋遍路
威勢よく始めの一步秋遍路
ボサノバに椅子を揺らして処暑の夜
古書店の主博識けふは処暑
処暑の夜貨車と列車が擦れ違ふ

夏から秋へ

綿貫ひさの

きやくきやくと枝で雨呼ぶ青蛙
豆絞りねぢり鉢巻山車引く子
水神の暴走したる厄日かな
末つ子の二十歳を祝ふ新酒かな
赤とんぼ古き校舎の窓枠に

盆

池田珪子

来し方を許し許され墓洗ふ
盆燈籠組み立て方を子に教へ
脚させど四本揃はず茄子の馬
佐渡は今けしむらさきに迎へ盆
茄子の馬波間に消ゆること速し

天の川

清水桂子

天空に遊ぶひと時天の川
うどんやの旗をからめる初嵐
柚道を通さぬ勢ひ藪からし
今日のひと日の命をたたみ白木槿
少子化をどこ吹く風と藪からし

夏の夜 篠崎紀子

休診の札に雨あし雷止まず
句を詠むに今も指折る夏座敷
下駄箱のその真中に胡蝶蘭
背景はいつも青空炎天よ
夏の夜の闇裂く吾ぞは救急車

のんびり休日 佐々木史女

亡き母の声に起さる昼寝かな
亡き夫の流灯揺れの激しかりけり
郭公の銜近づく山の宿
集ひては結論いまだ秋暑し
ちちろ聞きほつと一息仕舞風呂

処暑の候 山岸久美子

初嵐心の澱み攫ひゆく
高塀に澄まし顔して芭蕉かな
藪枯らし古木の棕櫚を搦め捕る
愛猫の眠りを醒ます処暑の風
瀬戸の海波とがりゆく処暑の風

毎月25日発売 月刊俳句界 2025年 12月号
定価1000円(税込)

推薦! 注目・期待する 俳人

◎近作12句とエッセイ
 神野紗希 西村麒麟 小川軽舟
 岸本尚毅 細谷曉々 三宅やよい
 川嶋ぼんだ 堀切克洋 伊藤幹哲
 土井探花 中西亮太

今更ニ 俳句界NOW 能村研三

特集 季語への託し方
 ○季語の包容力 涼野海音
 ○季語への託し方 山本一步
 しなだしん 大西朋 杉山久子
 なつはづき 阪西敦子 若杉朋哉

隔月連載
 座談会
 若手句集
 を読む 最終回
 相子智恵 坂井諒一 堀田季何 (司会) 井上泰至

セレクション結社「阿蘇」山下しげ人
 【注目の句集】高橋健文『一本の權』

「俳句界」投稿欄 一流選者10名! 充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。
 株式会社 文學の森 求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

現代俳句鑑賞

網野月を

土食つて生き薔薇色に蚯蚓死す

高野ムツオ

〔俳句〕8月号・盗蜜より

「蚯蚓」は土を食らつて生きているのだが、その土の色を「薔薇色」に変える力を持つている、というのである。自然界に生きる者たちへの礼賛がある。他に「盗蜜の八十年のこの暑さ」がある。

砂時計さらさら立秋へと崩れ

坊城俊樹

〔俳句〕8月号・幽霊より

「砂時計」の砂が崩れるさまを「立秋」の刻に向かつて崩れているというのである。瞬間をとらえて季節の大きな転換を感じているのである。他に「幽霊が座りキネマの夏となる」がある。

雨音のあとの風音五月忌

湯口昌彦

〔俳句〕8月号・五月忌より

上五中七に表現される作者の研ぎ澄まされた感性に座五の季語「五月忌」の効果絶大である。連句の標題である「五月忌」とは、こういうものである、と教示しているようである。

花菖蒲盗む足あとかもしれぬ

丹羽真一

〔俳句〕8月号・十二の薔薇より

菖蒲版の花盗人であろうか。菖蒲の生態から考えると周辺の土壌をよく表現している。多分、近寄つてよく見たい人たちの痕跡だとは思ふのだが。他に「花時計壊れてのこる薔薇十二」「餌をやるつもりなけれど緋鯉来る」がある。

初秋の海を見てゐる影法師

高松文月

〔俳句界〕8月号・新作巻頭より

この「影法師」を凝視しているもう一つの影法師がいるのである。勿論そのもう一つの影法師は作者ご自身である。「海を見てゐる影法師」は顔が認められない。なぜなら海の方を向いて作者に背を向けているからである。実際の位置関係は異にしているかもしれないが、俳句として表現する際に、作者との関係性を整理して描写したものであろう。

てのひらを桃の容に桃洗ふ

すずき巴里

〔俳句界〕8月号・俳句界NOWより

実際は逆であろう。桃を洗う際に掌が桃のかたちを捉えて桃のかたちになつていふことである。ではあるが、真

逆に捉え直すことで桃のデリケートな質を抽出しようとしたのである。大切に注意深く洗っている様が目に浮かぶ。他に「手のひらは月の花びら風の盆」がある。

蓮の実を飛ばして蓮の穴暗し 星野輝子

〔俳句界〕8月号・衣被より

蓮の実は砂糖漬けにして食したりするのだが、後に残った花盤の穴に作者は注目したのである。よく見れば奇妙な形態をした花盤である。その盤の一つひとつの穴が暗いというのだ。雨水が溜まったりして、被写体になることもある。「暗し」は心象が反映しているであろう。他に「衣被何も言はずに旨さうに」がある。

涼風に木々お返しのコラスを 具志堅忠昭

〔俳句界〕8月号・古酒より

「涼風」へ「木々」が「お返し」をしている、と解した。視覚的景の中に聴覚的に把握した「木々」の木擦れの音を配して、複層的な感覚の描写を可能にしている。喩え、もしくは見立ての手法であり、南国の「涼風」をテーマとして何とも心持の良い句になっている。

父の木を八月の水昇りをり 永井江美子

〔俳句四季〕8月号・巻頭句より

「父の木」はお父様の手植えの木、もしくはお父様が丹精していらした木と解した。中七の「八月の水」の措辞からはどうしても太平洋戦争を想起してしまうが、作者とお父様との関係性が滲み出ている句であることはよく理解できる。他

に「白枕にのこる黒髪いなびかり」「七夕の灯をくる風の余韻かな」がある。

絵みたいな文字みたいな絵みぞれ降る 斎藤よひら

〔俳句四季〕8月号・IIRCより

「絵みたいな」「文字みたいな」「絵」と解した。絵のような文字に似ている絵、と理解することも出来るが途轍もなく複雑な言い回しになってしまふ。座五の季語「みぞれ」の曖昧な質感が大前提である。他に「緑さす水槽にない非常口」がある。

虹む倅せいまだ書かれぬ福音よ 大井恒行

〔俳句四季〕8月号・声のない番犬より

「虹む倅せ」に薄幸とまでは言わないが、微妙な倅せを感じるのは筆者だけであろうか。そして後半の句意からの将に作者自身がエヴァンゲリストになったような感慨が取り合わされている。世界の紛争地域の子らの事々とも解せるし、極めて個人に特化した事柄としても解することが出来る。

八十八夜象の小さき目閉ざさるる 篠原広子

〔俳句四季〕8月号・薔薇を剪るより

象の目は小さい訳ではないのだが、その体躯に比すると「小さき目」の印象を与えているようである。上五の季語「八十八夜」の季感が句の内容を決定している。機嫌良くしている象のゆっくりとした仕種が表現されている。他に「生命線短き手もて薔薇を剪るより」がある。

『水明誌』を繙く（水明八月号）

浦川 聡子（「オリブの会」主宰、
「晨」同人）

ソプラノの歌に全開水中花 山本鬼之介

ソプラノは最も高い女声の音域。その中でも声質によつて「コロラトゥーラ」「リリコ」「ドラマテイコ」などに分けられます。「コロラトゥーラ・ソプラノ」は軽やかなトリル（コロラトゥーラ）などが際立つ澄んだ高音域の声で、モーツァルトのオペラなどによく登場するソプラノです。一方、「ドラマテイコ」はソプラノの中でも力強く劇的な表現力をもつ声質。オペラではヴェルディの「マクベス夫人」などの役柄に喩えるとイメージしやすいでしょうか。

この句の場合、同じ「ソプラノ」でもどんな種類の声かによつて、味わい方が違ってくるように思います。コロラトゥーラ・ソプラノの場合、澄みわたった声が空気を震わせ、その振動が水面に伝わり、水中花がさざめくように呼応するイメージ。ドラマテイコ・ソプラノの場合は、もっと官能的に、水中花に届いていくイメージ。劇的で力強く魅力的な声は、水を揺るがし、全開の水中花の奥へと響いてゆくのです。

「ソプラノ歌」「全開」「水中花」のキーワードが巧みに組み合わせられ、眼前に幻想的な情景がひろがります。

パウロ祭吾知る人を知る足日 網野月を

パウロ祭（聖ペテロ・パウロ祭）は、聖ペテロと聖パウロが殉教した日で六月二十九日とあります。多くの歳時記にはこの語は収載しておらず、初めてこの言葉に出会いました。

聖パウロという人をこの機会に当たってみると、もともとはユダヤ教徒としてキリスト教を激しく弾圧・迫害していたが、回心して、後は生涯をかけてキリスト教伝道者になったとのこと。聖書を読むと、回心するに当たっては、降臨したイエス・キリストと出会ったことなどが印象的に書かれてありました。

さて、そのことを踏まえて掲出句を改めて読むと、パウロ祭にパウロを思い起こしながら、「吾」について思いを馳せ、内省し、同時に「人（他者）」についても考えを巡らせている作者の姿が見えてきます。

「足日（たるひ）」とは、「物事の十分に満ち足りた良い日」のこと。忙中であつて束の間思索する時間がもてた日を「足日」と感じる作者の人生は、心豊かで満ち足りているように思えました。

俳誌望見 梅澤輝翠

「菜の花」

令和七年七月号

通巻七四一号

主宰

伊藤政美 発行所

三重県四日市市

昭和三十八年三月、山口いさをが三重県四日市市で創刊
平成十五年四月、伊藤政美が主宰継承。「俳句は自我と伝習
との調和の詩である」をモットーとしておる。

三籟集7 桜鱒 主宰句二十句より四句

憧れは今もあこがれ鳥雲に
突き当るかと思ふ春の満月
雲飛んでぼこんぼこんと春の山
波の音とうに忘れて桜貝

桜の園Ⅱ 花は葉に 主宰句二十句より三句

夜桜に来るなら化粧落としてこい
昔話のやうに立つては返り花
花は葉に次に会ふのは返り花
末黒野 平賀節代(副主宰) 八句より三句

清流へ走り根伸ばし山桜
だんだんと月の濃くなる夕桜
天の森集より三句

雉鳴くやすぐ突き当る輪中村
てのひらにのせてほどよき桜鯛
颯爽と子等の駆け足新樹光

岩佐 信子
加藤 美名
北野 武志

当月集より三句

尾を振つて声の届かぬ鳥の恋 南川 泰子
水辺には水辺の世界蝌蚪の紐 宮田かつこ
花筏だれも知らないところまで 八木茂都子
同人集より三句

剪定の切口にある自信かな 稲垣 和久
すぐそこに鳥の来てある春障子 岩田 志乃
霊山寺一段ごとの桜かな 上嶋 艶
菜の花集 三句 平賀節代選

気がつけば終着駅に田が植わる 山崎スナ子
やはらかき色のふくらむ春の山 中西 麻実
子育てのつばめ出入り町役場 西田 順子
―特別企画― 俳誌「菜の花」のあゆみ いさを

創刊主宰である山口いさをが先生が四日市へ着いた時の感慨
を詠まれた句。当時の四日市は菜種油の一大産地で、菜の花
畑が一面に広がっていたようです。この時の先生の決断が「菜
の花」誕生につながりました。

こうしてスタートした「菜の花」は平成十五年に伊藤政美
主宰に引き継がれました。

まみどりの茎が支へて花菜の黄 政 美

当初ガリ版刷りであった「菜の花」が今日に至るまでの歴史を
政美主宰が語られています。創刊号には未来への期待を
語る言葉として、草花が芽を出し、花をひらくように、自由
で伸び伸びした俳句勉強の場。「太陽がいつぱい！」そんな
雑誌でありたい(中略)よき種子を！よき芽を！よき
花を！

全国大会の記



青木鶴城

秋を迎えても猛暑が続き、終わらなかつた夏もやはり彼岸を過ぎると少しだけ風が変わった感の九月二十八日（日曜）に創刊九十五周年記念全国大会及び記念祝賀会が浦和ロイヤルパインズホテルにて開催されました。

大会においては記念作品の俳句部門、エッセイ部門、評論部門の表彰、水明六賞の表彰、大会兼題投句の特選や三極他の表彰があり、賞状・賞金、記念品が贈られました。

また、記念祝賀会には現代俳句協会の高野ムツ才会長、後藤章同専務理事、埼玉県現代俳句協会の杉本青三郎会長、埼玉県俳句連盟の稲田眸子会長の他、俳人の池田澄子様、俳句雑誌「俳句」「俳句四季」「俳壇」「俳句界」及び、ふらんす堂、埼玉新聞社の関係者を来賓としてお迎えしました。

【全国大会開会】

定刻の十三時、網野副主宰の開会の挨拶の後、この一年間にお亡くなりになった由良ゆら女様、蛭田律子様、田寺玲子様のご冥福を祈り黙祷を捧げました。

【主宰挨拶】

水明創刊九十五周年を迎えることが出来た喜び、五年後の百周年へ向けての更なる躍進、来年の一月号より新編集部による「水明」の刊行の発表と共にこれまで長年ご苦労をされた現編集部の皆様への労いの言葉を頂きました。

【会計報告】

日高道を総務部長より令和六年度の会計報告がされ、誌代収入及び同人・季音同人費収入では会の運営固定費用を賄えないのが現状であり（会員一人当たり月額約七百円の赤字）、皆様の篤志による発展基金の補填によつて運営出来ている旨が報告されました。

【特別功労賞の表彰】

大会兼題句の多数の投句、俳句大会等の行事への積極的な参加及び水明俳句会の活性化への尽力に対して、五明昇、境延昭のご兩人へ特別功労賞が贈られました。

【九十五周年特別作品表彰】

俳句部門、エッセイ部門、評論部門について下記の方々へ賞状と賞金及び記念品が授与されました。

俳句部門

正賞…五明 昇、準賞…池田雅夫、

準賞…佐々木史女

エッセイ部門

正賞…清山尚己、準賞…元田亮一

評論部門

準賞…青木鶴城

【句集紹介・花束贈呈】

令和六年度に上梓された句集「曆文三百六十五句」の筆者の新曆文氏ならびに、今回「長谷川かな女の一〇〇句」を上梓された山本鬼之介主宰に花束が贈呈されました。

【水明六賞の表彰】

水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞の受賞者に対して主宰より賞状と賞金及び受賞者の名前を詠み込んだ句の色紙、鼓笛賞及び山紫賞の受賞者にはそれぞれ大村節代氏、網野月を氏より賞状、賞金並びに短冊が授与されました。各賞の受賞者及び受賞者への主宰句は下記の通り。

【水明賞】

菅原卓郎 円卓の騎士を迎ふる女郎花

新 曆文 日めぐり曆繰るや文月を惜しみつつ

【季音賞】

河野はるみ 秋うららみ空をはしる吾が心

曲淵徹雄 岩山を徹す雄叫び望の月

【かな女賞】

永野史代 月代や歴史に遺る一夜過ぐ

【新珠賞】

石関六弦 弦月愛づる六文銭の上田城

岡田宣子 外つ国の宣紙に大書皇子の秋

菅原卓郎 管傘の似合ふ男よ秋の原

【鼓笛賞】

反町 修

【山紫賞】

綿引まりこ

受賞者へ各々の所属句会より花束贈呈があり、それぞれ喜びの挨拶の後、写真撮影となりました。

【委嘱状の授与】

新同人、季音昇欄同人へ主宰より委嘱状の授与がありました。対象者は下記の通り。

【新同人】

宍戸洋子 室井早都子

畠中風花 岡本祥子

平野 楽 前田夏野

【季音「月」欄↓「雪」欄】

松井由紀子 森川義子

【季音「花」欄↓「月」欄】

河野はるみ 曲淵徹雄

瀬戸雄二郎 松島寛久

【新季音「花」欄】

菅原卓郎 新 曆文

清水桂子 佐々木史女

松村笑風

田中弘子

石川理恵

田中章嘉

池田瑠子

山岸久美子

【兼題句表彰】

事前投句の兼題句（「雲の峰」、「螢」、「白」の詠み込み）より主宰選の三極と特選及び秀逸句の表彰があり、主宰より三極及び特選には色紙、秀逸の作品に短冊が授与されました。尚三極の発表は最後まで伏せてあり、特選及び秀逸の発表が終わった後、句が揮毫された掛け軸（青木鶴城書）を垂らしながら発表される演出がありました。

三極の句と作者は下記の通りで、特選、秀逸その他の参加投句は別紙に掲載されています。受賞の皆様大変おめでとうございました。

【三極】

〔天〕余花なほも白亜まばゆき天守閣 石井喜恵

〔地〕水平線の雲の峰蹴り海女潜る 梅澤佐江

〔人〕秩父路や機音恋し宵螢 大塚茂子

【高得点者表彰】

兼題句の高得点者の表彰があり、記念品が授与されました。全投句者は一三七名、高得点者は下記の通りで、五明昇氏の圧勝でした。（五点以上の表彰対象者は五〇名）

第一位 五明 昇 (五一点)

第二位 境 延昭 (三一点)

第三位 皆川更穂 (二三点)

【八組以上投句表彰】

兼題句の八組以上の投句者（四二名）への表彰があり、記念品が授与されました。毎年、驚く数の投句をされる五明昇氏には頭が下がります。

第一位	五明 昇	(五四組)
第二位	境 延昭	(三七組)
第三位	鳥羽和風	(二〇組)
	皆川更穂	(二〇組)
	大塚茂子	(二〇組)

【主宰の講評】

三極を始め、特選句及び秀逸句について主宰の講評を頂きました。時間の関係で全句の講評とは行きませんでした。主宰の講評に皆さん熱心に耳を傾けていました。

【閉会】

大村節代編集長より閉会の言葉を頂き、主宰の拍子木に合せて恒例の関東三本締めで、全国大会はお開きとなりました。

司会を務めて頂いた日高道を総務部長、事業部の小林京子さん大変お疲れ様でした。

【祝賀会】

全国大会の終了後、来賓の皆様を迎えて全員の集合写真の撮影を済ませ、祝賀会会場へと移動、七六名が懇親会のテーブルに着席。祝賀会の幕開きとなりました。

主宰の挨拶の後、高野ムツオ現代俳句協会会長のご挨拶、池田澄子様のご発声で乾杯、歓談となりました。今年のアトラクションは、「若狭鶉の瀬のお水送り」の神事において山伏として役目を果たされている原田自然さんの法螺貝演奏と剣の舞の披露及び「クリアウオーターリバイバルバンド」の演奏との二本立てでした。

お水送りの神事の披露は若狭から出席の原田自然氏と網野副主宰の法螺貝の吹き合わせに始まり、山伏姿の原田自然氏による剣の舞（大護摩）が披露されました。

バンド演奏は、「青葉城恋歌」「コーヒールンバ」「上を向いて歩こう」「東京ブギウギ」「銀座の恋の物語」「横浜ホンキートンクブルース」「はじめてのキス」「ハウンドドッグ」と盛りだくさんの演奏と歌で盛り上がりました。今年は歌への参加やダンスフロアへ出る人が沢山で、来賓の皆様も十分にお楽しみの様子でした。

お楽しみの内に終了の時間となり、網野副主宰の閉会挨拶の後、関東三本締め、北山建治郎氏の応援エールで幕を閉じました。尚、会の様子が「ふらんす堂」のホームページで紹介されています。ご覧ください。関係スタッフの皆様大変お疲れ様でした。

水明全国大会
会場風景



池田澄子氏

高野ムツオ現代俳句協会会長



令和7年度 主宰と各賞受賞の方々





水明全国大会 入選句

兼題

「雲の峰」

「螢」

「白」

(詠み込み)



山本鬼之介選

【天】

余花なほも白亜まばゆき天守閣

石井喜恵

【地】

水平線の雲の峰蹴り海女潜る

梅澤佐江

【人】

秩父路や機音恋し宵螢

大塚茂子

【特選】

雷雲の国生みの島恫喝す

落ちてなほ白は神慮の沙羅の花

指笛を習ふ少年雲の峰

望郷の水平線や雲の峰

螢火の懇ろに舞ふ化粧坂

億光年の過客待ち受け恋螢

航跡は一路北へと雲の峰

激闘のあとの一礼雲の峰
地果てて始まる海よ雲の峰

石庭の白砂を乱す男梅雨

ナブキンの白帆を解く夏料理

雲の峰短足愛し農耕馬

棟上げの白幣吹かれ夏夕べ

入相の鐘に火点す螢かな

夏椿白の矜持を保ちけり

白濤の消えて岬の夕焼けかな

肥後六花白を極むる花菖蒲

部屋中に螢放つや里帰り

禅寺に白を尽くせり沙羅の花

あこがれの田舎暮しや雲の峰

枕経妻を導く夕螢

睡蓮や白の極みを浮かせをり

浦風に平家螢の仄点り

霊峰をはるかに凌ぎ雲の峰

螢火や恋を知らずに九十九髪

雷雲を抜け白光のインパルス

雲の峰真珠の育つ海深し

螢火のゆらめく闇は神代より

秩父嶺は太古の海ぞ雲の峰

鳶は輪を鴉は山へ雲の峰

杭一本渡し跡の跡や雲の峰

五明昇

五明昇

五明昇

大村節代

井上燈女

原田秀子

石山かつ子

池田珪子

丸山マスミ

菅原真理

越田栄子

島津初花

島羽和風

鳥羽和風

皆川更穂

池田雅夫

染谷風子

大橋迪代

永野史代

十倉和子

境延昭

境延昭

星野和葉

天からの使者とも思ふ螢の火
 名峰を押し潰すなり積乱雲
 歩を馴らす神馬の白さ青葉風
 手に囲む螢火うれし遠き日々
 丸木橋二つ越えたる初螢
 屋上にはためくシート雲の峰
 百選の水面に揺るる螢の火
 夏椿落つるも白さそのままに
 地引網雲の峰より引き寄する
 サマルカンドブルーは遙か雲の峰
 心経の白衣を敲く滝しぶき
 大峰に錫杖の音雲の峰
 漆黒の谷川渡る初螢
 匂やかに螢の守る古墳群
 白衣着て理系の人となる五月
 ほうたるの千々に彷徨ふ古戰場
 木造の改札抜けて雲の峰
 故郷のホームから見る積乱雲
 庭園のウエディングフォト初螢
 入道雲少年の日の海の色
 夏座敷余白を活かす水墨画
 八寸に程好き余白はじき豆
 雲の峰機雷が今もこの海に
 ビストロのグラス逆しま雲の峰

日吉亜弥子
 保坂翔太
 熊倉千重子
 下川光子
 石山かつ子
 町野広子
 丸山マスマ
 菅原真理
 荒井俱子
 鈴木玲子
 鳥羽和風
 鳥羽和風
 皆川更穂
 皆川更穂
 皆川更穂
 皆川更穂
 皆川更穂
 石関六弦
 元田亮一
 元田亮一
 梅澤輝翠
 反町 修
 田中弘子
 山崎郁子
 境 延昭

雲の峰旅の一座の旗がゆく
 白壁の街に浴衣の赤い帯
 螢火の一つが迷ふ曼荼羅堂
 水芭蕉純白の帆を揚げそろふ
 川端の闇ほどきゆく螢の火
 頂上を目差すハイカー雲の峰
 あおあおと螢炎えたる隠れ里
 をみなにも白き口ひげピアホール
 雲の峰上れば下る坂の街
 螢火や胸の鼓動のままに揺れ
 終業のチャイム響けり雲の峰
 雲の峰ひと雨を待つ棚田かな
 ユトリ口の貧しき白やパリー祭
 雲の峰大山塊を跨ぎ来る
 膝に傷泣かぬ少年雲の峰
 白壁の蔵並ぶ町風薫る
 牧場に馬の親子や雲の峰
 月下美人白き吐息となる一夜
 新任の教師迎ふる雲の峰
 原爆ドームあの日もこんな雲の峯
 襟首や雲の峰からよこす風
 石庭の白砂奔る瑠璃蜥蜴
 螢火の消ゆるしじまの深き闇
 若冲の老松白鳳凶涼し

境 延昭
 石田慶子
 十倉和子
 十倉和子
 小山あつ子
 笹本啓子
 本橋稀香
 本橋稀香
 星野和葉
 新 曆文
 野口和子
 松村笑風
 正木萬蝶
 倉田星歩
 福田千春
 森下美智枝
 森下美智枝
 小林京子
 日高道を
 日高道を
 平野 楽
 梅澤佐江
 西幅公子
 岡田宣子

雷雲や暮ひく如く雨柱

独りゐのほたるの井戸を巡りたる

湖の涯なる城や雲の峰

城壁の穴は銃眼雲の峰

碧空を陣取る巨人雲の峰

不尽山と背丈を競ふ雲の峰

初螢杜氏の白き手に遊ぶ

雷雲をぐるんと回す逆上がり

夏山や思ひ起こすは李白の詩

白塗りの役者の矜持青楓

編隊機雲の峰より現るる

白帯の受身百回夏道場

雲の峰心許なきひととり旅

正南風にまかす白帆の快遊船

奮ひ立つ番屋の沖の積乱雲

ほうたるの虚空に惑ふ尾灯かな

青白き企業戦士に夏の月

入道雲目がけ少年突つ走る

黒板も白墨もみな夏休み

夕螢亡父と座せり庭の石

入道雲君の化身と思ひ見ゆ

洪谷きいち

網野月を

秋谷風舎

境 延昭

宮崎チアキ

原田自然

飯室夏江

石川理恵

丸屋詠子

寺町知子

横山君夫

北山建治郎

霜多光代

菅原卓郎

菅原卓郎

菅原卓郎

茂木和子

内田恵子

阿部幸代

小倉倭子

山中みどり

佳作

水を恋ひ水を慕ひて初螢

少年と仔犬の未来雲の峰

名画なる神の背丈や雲の峰

螢くる庭の小枝で風呂焚けば

但馬路やほろ酔ふて待つ宵螢

白猫のニヤと寄り来る梅雨晴間

総帆展帆終へし歓声雲の峰

志功の女人どれも豊満雲の峰

雲の峰を回してをりぬ大車輪

入魂のスマッシュ一打雲の峰

雲の峰鴝色見する夕間暮れ

螢付き少女の髪のみどりなる

螢ひとつ飛び出て夫の遺愛の書

白毫に山蟻宥し磨崖仏

出稽古の白きまわしや雲の峰

藍染の刺し子の着物初螢

螢の香人間の香や明け易し

水明の白寿を思ふ涼しさよ

待ちて大和を統べる雲の峰

山城を押し上げてゐる雲の峰

瀬戸内の潮目遙かに雲の峰

遠山の近く見える日雲の峰

関根千恵

関根千恵

菊池ひろこ

菊池ひろこ

森本早苗

森本早苗

大場順子

安曇野の水滔々と初螢

シーツ真つ白ぱりつと乾く夏蒲団

井戸端の闇やはらかし螢とぶ

無言館出でてほたるの精に逢ふ

決勝打決めし白球雲の峰

白抜き文字割つて入る夏のれん

入道雲安達太良山を遥かにす

その科白そつくり返す心太

見上ぐれば父の声する雲の峰

ほうたるの命の匂ひ残る指

目瞑れば浮かぶあの声初螢

黒髪を揺らして白き夏帽子

葉桜や日輪白く雲に解け

前進の外野ばんざい雲の峰

奥能登の平家屋敷や夕螢

白の地に黒を打ち込み夕端居

雲の峰忠治破りし関所跡

生国を遠見の麒麟雲の峰

入道雲と競ひあふごと草を刈る

手から手へ移す螢のまた飛べり

白壁の土蔵に映える蔦青し

過疎の村を呑み込みさうな雲の峰

手にとれば思ひを燃やす螢かな

告白の途切れ途切れに螢の夜

森川義子

森川義子

佐々木史女

大塚茂子

大塚茂子

大塚茂子

飯田忠男

綿引まりこ

曲淵徹雄

曲淵徹雄

曲淵徹雄

曲淵徹雄

近藤徹平

近藤徹平

近藤徹平

近藤徹平

近藤徹平

飛永鼓

飛永鼓

飛永鼓

青木鶴城

青木鶴城

青木鶴城

我が胸の思ひは堅し雲の峰

印結ぶ修験の僧や雲の峰

名城の矢狭間のあなた雲の峰

日蓮像がはつたと睨む雲の峰

舟唄や雲の峰立つ最上川

雲の峰装束固き行者講

螢追ふ過ぎし昔を眼裏に

ほうたるを肩に沈思の大男

南無大師結界越ゆる初螢

溪深き秘湯の宿り螢の夜

銘酒「真澄」干してこれより螢の夜

駅長の純白の挙手風薫る

南吹く遠白波の材木座

緑蔭に画板つらねて白帽子

白抜きの家紋を浮かす夏暖簾

白亜紀の地層を巡る夏帽子

夏霞偲びて哀し白虎隊

白松曾の林を包む夏の霧

熱血講師が白墨を折る夏期講座

アルプスの夏嶺へかざす白ワイン

船底のやうな靴底雲の峰

草一本許さぬ畑雲の峰

夫の香の残るTシャツ螢の夜

逝き急ぐ勿れ入道雲がつかいぞ

青木鶴城

五明昇

町野広子

町野広子

町野広子

町野広子

勇壯な戦艦三笠雲の峰

白黒を言はぬを学び帰省の子

雲の峰三蔵法師の旅の跡

あふるる夢や入道雲は果てずわく

鎮守の杜へつづく砂利道雲の峰

グラマンに追はれし記憶雲の峰

葉桜の中に白樺美術館

夕闇に胸ときめかせ初螢

三時指す校舎の時計雲の峰

雲の峰村の外れの一本杉

電線にすずめ一列雲の峰

学舎の午後のチャイムや雲の峰

屹立の入道雲や覇を競ふ

我も的なり腕白の水鉄砲

小さき掌に螢一匹賜りぬ

雲の峰タンカーゆらりと入港す

白南風やロングスカート翻る

土手走る自転車狙う積乱雲

落暉負ふ白鷺一羽千枚田

手古舞の鼻すぢ真白夏まつり

白樺の葉みやげに五月果つ

切り岸に鳥の群れとぶ雲の峰

雷雲やメタセコイアの穂の気負ひ

間において又一つ飛ぶ初螢

笹本啓子

杉浦千祐

杉浦千祐

杉浦千祐

境 延昭

本橋稀香

本橋稀香

松山清子

松山清子

松山清子

川島夕峰

石黒由美子

星野和葉

星野和葉

星野和葉

星野和葉

星野和葉

梅雨晴や白寿の友と酌み交はす

応援の声の掠れや雲の峰

螢の夜疼く小指の逢瀬かな

夕涼み白き産着の赤き頬

朝の川螢眠りし静寂かな

ほうたるや夫の帰りを待つ海辺

白波や帆を繰る君の二頭筋

夏風邪や白湯白粥に倦みし今朝

見晴るかす阿蘇の五岳や雲の峰

AIにも予測不能の入道雲

うなじ灰と息をつつしむ宵螢

螢舞ふ水の流れに沿ふやうに

夏の山振り返る子の白帽子

螢火の乱舞恋しき人は来ず

ドローンに泰山木の白き花

螢狩りとてホタルへ向かふ人の列

雲の峰水鏡見て姿変へ

万緑や生まれ変はりか白き鳥

成田発の機影煌めく雲の峰

白馬岳の御来光見て涙落つ

琵琶湖岸に釣人独り雲の峰

しまなみの橋の上から雲の峰

頂から浅間全容雲の峰

闇が来て氷川の森の初螢

星野和葉

新 曆文

新 曆文

野口和子

野口和子

糸井しるく

松村笑風

正木萬蝶

正木萬蝶

正木萬蝶

倉田星歩

菅原真理

福田千春

福田千春

瀬戸雄二郎

小駒さち子

小駒さち子

三浦真由美

森下美智枝

森下美智枝

森下美智枝

森下美智枝

森下美智枝

森下美智枝

またの世の母と逢ふ場所宵螢
 水底の光集めてほうたるに
 ほうたるよ宵は短し励むべし
 大き手の小さき手へと螢かな
 雲の峰貨物列車の長き帯
 瀬戸内の島それぞれに雲の峰
 雲の峰ゆるり過るや飛行船
 蚊取線香白磁の皿に構へをり
 告白はすべて過去形ソーダ水
 ほうたるを妻が少女の声で追ふ
 頭まつ白けむり出さうな油照り
 少年のでつかき夢や雲の峰
 若者と連れ立ち待つや初螢
 白壁に泥の巢ありて夏つばめ
 み仏の白豪ほのか蟬しぐれ
 雷雲の布陣赤城を被ひたり
 白き帽脱げば親しや夏の富士
 螢火の流れ流れて竹林へ
 大皿の余白涼しき料理かな
 何処までも続く航跡雲の峰
 ほうたるや今宵はラストダンスまで
 琵琶の音は夢か現か夕螢
 刻々と姿変へ過ぐ雲の峰
 雲の峰仁王立ちして秩父かな

羽島 秀子
 横山 礼子
 秋谷 風舎
 森 和子
 河野はるみ
 河野はるみ
 河野はるみ
 河野はるみ
 河野はるみ
 河野はるみ
 境 延昭
 境 延昭
 境 延昭
 境 延昭
 境 延昭
 宮崎チアキ
 原田自然
 松井由紀子
 松井由紀子
 松井由紀子
 飯室夏江
 石川理恵
 高橋満耶子
 高橋満耶子
 丸屋詠子
 寺町知子
 榊原聰子

放たれたものを知りつつ螢狩り
 螢去り漆黒の闇戻りけり
 思ひがけず優しき言葉夕螢
 夏祭腕白相撲に夢をのせ
 入道が子分従へ積乱雲
 トンネルへ一両電車や雲の峰
 落人の化身なるとや夕螢
 入道雲背押すごとくせまりくる
 故郷遙か山の神社の夕螢
 ふる里は再開発や雲の峰
 もくもくと横綱どつち雲の峰
 雲の峰お国自慢の山自慢
 天国へのぼる階段雲の峰
 黙祷のみな白髪や原爆忌
 帆船の進む海原雲の峰
 江ノ電の踏切の音雲の峰
 夏神楽笛の少年白袴
 バラモンの猛る神神雲の峰
 南溟へ舵切る船や雲の峰
 過去帳の始祖は平家か夕螢
 初螢ともす露天の長湯治
 水鏡うつす棚田の螢火よ
 甲子園めざす白熱雲の峰
 螢群るゴーストタウンへ続く道

駒谷行雄
 横山君夫
 畑宮栄子
 畑宮栄子
 松宮保人
 松宮保人
 松宮保人
 松宮保人
 三森恵子
 関谷多美子
 山戸美子
 北山建治郎
 北山建治郎
 川崎道子
 霜多光代
 小野町子
 小野町子
 小野町子
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 菅原卓郎
 稲野幸子
 茂木和子
 内田恵子

新季音同人

わたしの近詠二句

池田珪子

清水桂子

山岸久美子

北限の桜に戦ぐ鯉のぼり

五月中旬青森県を旅行した。県が桜の苗木を植える事を奨励しているそうで、桜の多い美しい県である。広大な菜の花畑、満開の桜そこに一匹の大きな名残りの真鯉が体一杯に風を孕み悠然と泳いでいた。

かな女の句集を読むと「季重り」の多い事に驚かされる。「季重り」にもっと柔軟であつてよいのではないかと思う。

熊笹に音のなき雨閑古鳥

上高地今年のウェストン祭は雨であつた。朝食前大正池まで散歩をした。あの辺は熊笹が多い。帰り道背後で郭公が鳴き出した。だんだん近づき訴える様に激しく鳴いている。この句が出来た。「下五」は現地では「遠郭公」であつた。翌日家に帰り「郭公鳴く」に直した。数日後「閑古鳥」に替えた。やっとしっくりしたと自分では思っている。

逃水を追うて八十路の青い鳥

今思い返せば俳句は、学生時代から好きな分野であつたが、授業で学ぶ以外特に携わることなく、自分の時間が持てるようになった六十代から色々な習い事に首をつっこんだが特に夢中になるものも見つからず、全て頓挫した。七十代で水明に入会して五年。やっと今生き甲斐として俳句を感じている。そして俳句は魔物だと痛感している。

山眠る添ひ寝するかに山里も

東京から空襲を避け、父の里の岐阜の養老駅に下りた時私は七歳であつた。目前に養老山が黒々と聳え、その山並と麓の人家のぼんやりとした灯りが、鮮明に心の風景として残つていた。その後、今まで旅先で夜の山々と山裾に広がる家並を見ると、何故か七歳の頃に見た景色が眼裏に浮かぶ。それはまるで、母親が添ひ寝しているかのように、私には、見えたのである。

考える人ブロンズ像の秋思かな

秋のある日の午後、西洋美術館を訪れました。ロダンの「カレールの市民」「考える人」の彫像が迎えてくれました。考える人の像を眺めると深い苦悩に沈んでいるように見えます。顎にあてた腕や手指、両足と上体をかがめた姿に重量感があり、立派な男性です。

この像は全身で考えている様です。その表現の深さに驚嘆します。この像は苦悩をのり越え希望に向かつていくのだと思いました。

次世代に贈るよきもの青田かな

大宮の駅を過ぎると眼前に広がる青田に出会います。稲の葉が風に揺れて何とも言えず心が和みます。かつて姉の車で伊豆方面に向かっている時、荒れたまま放置されている休耕田が見られました。それを眺め、何とも言えず悲しみがこみあげてきました。

関東平野の台地に青田を見ると、その美しさに感動します。美しい青田を次世代に、とこしえに残してほしいと思います。

新同人紹介

— 令和7年 —



宍戸 洋子

水明入会 令和五年
所属句会 コクーンシテイカル
チャー俳句教室

囀りに耳遊ばせて針仕事
恋猫の皿蹴つてゆく闇の中
紺深き茄子漬添へて朝の卓
人はみなちがふ生き方夜長の灯
迷ひ来し蟪蛄そつと外に出し

このたびは、水明俳句会同人にお迎え頂き誠にありがとうございます。
うございます。

俳句は、まだまだ未熟者ですが、境先生のご指導のもと、
教室の皆様と共に学べる事に感謝しております。

これからも、日々研鑽を積んで参りたいと思います。
宜しくお願ひ申し上げます。



室井早都子

水明入会 令和六年
所属句会 コクーンシティカル
チャー俳句教室

よく笑ふ母も子も妻草の餅
片蔭や風にふくらむワンピース
三輪車草に埋もれて虫の城
ポケットにささ栗ひとつ山土産
記念樹の今年も芽吹く校舎跡

水明同人にお迎えいただき、ありがとうございます。
以前から句会に参加してみたいと思っていた私の背中を
押したのはコロナでした。以来、延昭先生や先輩の皆様にご
指導いただき、楽しく学んでおります。これからも俳句
を通して視野を広げていきたいと思えます。どうぞ宜しく
お願いいたします。



松村笑風

水明入会 令和三年
所属句会 若狭水明会

思ひたつ今日がスタート木の芽時
目高ゆく言葉の波に溺れまじ
天の川星の数ほどある言葉
追ひつけぬ風の背中や桐一葉
初吟行枯葉ひとつも目に新た

この度は水明同人にお迎え頂きありがとうございます。
句の中の「追いつけぬ風の背中」とは、わが師匠の鳥羽和
風先生のことです。
この先も和風先生はじめ諸先輩方の背中に追いつくこと
はとうてい出来ませんがせめて見失なわないように、日々
精進し私の言葉探しの旅を続けてまいります。



畠中風花

水明入会 令和三年
所属句会 若狭水明会

担ひ手がまたひとり減り秋の暮
青蜜柑朱色のネット際立てり
梨狩りや産地を謡ふ道の駅
廃線のレンガトンネル萩の花
ジェット機の遥かに消えて萩の露

私と俳句の出会いには鳥羽谷俳句会の先輩方からのお導きです。当時勤務していた鳥羽公民館々長の宇田白鷺さん、そして転勤後疎遠になった私に欠かすことなく句会のお知らせを届けて下さった飛永鼓さんには大変感謝しております。まだまだ初心者ですが最近少し楽しさが分かってきたような気がします。これからも宜しくお願い致します。



岡本祥子

水明入会 令和三年
所属句会 鳥羽谷俳句会
小原乙花句会

移住の子揃ひ衣装の秋祭り
鐘の音の響く早朝白露の日
統率のとれし立ち居や鶏頭花
池 覗く秋海棠の映え姿
芙蓉閉づ明日のプランを練る夕べ

この度は未熟な私を同人に加えて頂きましてありがとうございます。ございます。
毎月の句作に苦しんで居りますが、四季の訪れを切り取り言葉に紡ぐ俳句と出合い感謝して居ります。俳句を通して豊かな日々を送る事が出来ればと思つて居ります。
今後共よろしくお願い致します。



田中弘子

水明入会 令和六年
所属句会 芽吹句会

懸緒截つ和鉢の音秋気澄む
教会の扉の軋み大芭蕉
ソムリエの所作淡淡と秋涼し
ふくふくと蔵に満つ香や新走り
北斎と鴻山の声栗の道

この度は同人にお迎えくださり有り難うございます。
日常の細やかな事象を十七音に切り取る難しさ、奥深さを楽しんでまいりたいと思います。

鬼之介主宰はじめ同人の皆様、ご指導どうぞよろしくお願いたします。



平野 楽

水明入会 令和五年
所属句会 めだか句会
若楠句会

ソーダ水縁切り寺の先の茶屋
抱擁の顔の火照りに秋の風
二八蕎麦締むる技こそ寒の水
桐箱の蓋をもたぐる雛人形
花の下しばし鬼平役となり

この度は水明同人にお迎え頂き誠に有難うございます。
まだまだ未熟者ですが、句作を通して皆様と交流できることをいつも楽しみにしております。

鬼之介主宰、月を副主宰はじめ諸先輩、句友の皆様にご指導頂き、これからも俳句の奥深さを探求していきたいと存じますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



前田夏野

水明入会 令和五年
所属句会 第五例会
蝌蚪の会

瘦する枝に余る光や春立ちぬ
日本海臨むザレ尾根残る雪
楼蘭の鵬羽搏ける黄砂かな
緑蔭や名草咲き初む寺の庭
日傘揺る濠の光を掬ひとり

この度は水明俳句会同人にご推挙頂きまして、ありがとうございます。歴史ある俳句会の一員として身の引き締まる思いです。これからも主宰、副主宰、諸先輩方のご指導を賜りながら、句会の皆様とご一緒に精進を重ねたいと存じます。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

俳句

12月号 予告

11月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)⑧

巻頭作品50句 一正木ゆう子
作品21句 一鈴木貞雄・対馬康子

遠景と近景

大 特 集

【総論】「景」の多角性「各論」俳句における遠景／遠景の名句／俳句における近景／近景の名句
【番外編】中景句のすすめ／吟行における着眼の意識

句集特集 坂本宮尾句集

『ゆるやかな距離』

好評連載
小林秀雄の眼と俳句……………青木亮人
飯田龍太の世界……………廣瀬悦哉
俳句の水脈・血脈……………角谷昌子

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

山本鬼之介 選

水明集

手放せぬ本を手厚く曝書せり
黙禱を知るや知らずや蟬時雨
目に見えぬ姿を追うて魂送り
霊山の稜線蒼き夏の果
水打つて今日の客足祈りたり

平塚 丸屋詠子

玉虫のなきがら動く玻璃の棚
読書家を「本の虫」とや虫払
本郷に残る旅館の作り滝
昼ビール眼とろんと別れ行く
骸なる子を抱く腐草螢となる

さいたま 小林京子

雲海の割れし底より街出づる
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
夕焼けを追ひ越すやうにバス急ぐ
蚊を目掛けパクンと空を食む犬や
御師の宿目指す富嶽は雲海に

利根 倉田星歩

夕されの風にたをやか酔芙蓉
天高し富士に近づく遊覧船
ちかちかと沢水蘆の花揺らす
山間の一村包む天の川
独り居を一尾の秋刀魚満たしをり

さいたま 岡田宣子

青嵐調神社ごとひと飲み
蝸牛ゆるり進めば海の見ゆ
娘発ち夜は独りの天の川
秋風をはらみ単車の彼来る
無人駅通過このまま走れ銀河まで

菅原真理

神鳴や両面打ちの大太鼓
忙しなき人と別れて月見草
玉虫が棺の端より飛立てり
遠雷や入れ歯を外す楽隠居
退院の君と歩めり日日草

皆川更穂

稲の花望みを託す米農家
少子化の進みゆく里稲の花
時の間の風にこぼるる稲の花
鬼灯を鳴らして話す昔かな
風を待つ鉄の風鈴夫みやげ

若狭 岡本祥子

笹迫の朱色きりりと六月の婚
甘辛きかんべう母の五目鮓
「完売」とパン屋早々初嵐
息切れや屋敷と畑藪枯らし
新涼を纏ふ裸婦像美術室

越谷 阿部幸代

秋出水産着の裾を蹴る命
新松子嬰兒の匂ひ刻々と
天領でありし薨や秋祭
病癒え嘶家そろり秋羽織
寄席はねて上野の森を夏の月

さいたま 田中弘子

フィヨルドやオスロの街は星月夜
秋の夜や「続く」で終はるサスペンス
さはさはと笹の風音今朝の秋
日の盛鬮牛告ぐるファンファーレ
練習のドラム炸裂夏野原

さいたま 反町 修

かきつばた和装本その軽さかな
黒南風や入り江に軋む舫ひ船
沙羅の花庭苔に落つ二つ三つ
尾を残し足取り軽く蜥蜴の子
遠花火消えて静もる捨て小舟

寺町知子

すれ違ふ船に手を振る夏の湖
山影や水琴窟の涼しき音
古書俳誌童話ごちや混ぜわが曝書
どこまでも同じ金魚を狙ふぼい
寝られねばいつそ短夜ホウの刻

本橋稀香

川波の砂踊らせて秋来たたる
今朝の秋食器の音の微妙なる
秋立つや庭を過ぎゆく風の音
灯の入りて鬼の形相大佞武多
火の色に染まりゆく街佞武多来る

霜多光代

かなかなの時折揃ふ城の址
八月の折り目増えたる新紙幣
ふるさとの風を見てゐる案山子かな
秋の日や深く根の張る夫婦杉
人待ちのジッポー響く盆の月

石関六弦

日盛やラーメン店の愚痴を聞く
お代はりと母に差し出す帰省かな
夜の秋億ション見上ぐ若夫婦
加護あれとガザの子ども等灼くるのみ
西日濃し静まりかへる介護棟

さいたま 元田亮一

大文字恋の終はりを乗せて燃ゆ
忘れたきことも託すや大文字
抜け殻に恋し鳴きけり秋暑し
密やかに紅沁み出づる酔芙蓉
たゆたひて惑ふ朝に芙蓉咲く

さいたま 前田夏野

家犬の上座に臥する大暑かな
月下美人のささやくや夢の刻
身を拭ふ秋暑の沢や熊注意
石畳灼けて靴底こそばゆし
秋刀魚買ふ細き身をちと嫉みけり

秋谷風舎

癌なんて二人に一人二輪草
手を繋ぐあなたがゐない秋の風
コスモスや優しく老いて寄り添へり
モノクロのビルの裏道緋のカンナ
小鳥来る武器を捨ててと小鳥来る

綿引まりこ

常盤木の上枝をゆする初嵐
初嵐こそこそ逃ぐるどぶねずみ
夫婦喧嘩をビールの泡の希釈せり
藪枯らし出窓のポトス捕りにくる
心臓の手術四度よ秋の空

飯田忠男

夏の山徒へ出雲大社^{おやしろ}
困難は受け容るるもの汗拭ひ
九寿餅の三角に幸の見え隠れ
くず餅や崩れ落ちたる蜜きな粉
背番号3四番三星長嶋忌

平野 楽

ありふれた暮しが大事夏の空
打ち水で地球の温度少し下げ
八月十五日非戦の願ひ外つ国へ
盆踊り輪の中心は婦人会
欲張らず正直に生き酔芙蓉

東京 畑宮栄子

月代や仔象のゆばり大河なす
四暗刻ツモる鯛鳴きはじむ
「ごめんね」と担架の妻の目に秋思
乙字湯腑にゆく途次の稲つるび
化け鯉を抱いて俵武多の大首絵

森下山菜

十分も外に居られぬ残暑かな
籬もはや翼広げて天高し
みちのくの明けゆく街の薄紅葉
武蔵野の森を揺さぶる野分かな
裏山の竹荷車に盆用意

さいたま 播磨 進

つくつくし一瞬止んで又鳴けり
独り居に広すぎる庭草むしり
小雨なら濡れても励む草むしり
眠れぬ児にお伽噺を天の川
ブラウスの胸のブローチ天道虫

若狭 山崎郁子

さきたまの古墳灼けをり影もたず
鉄剣の一一五文字晩夏光
白日の天を仰げり原爆忌
旅に出てねぶた囃子の中にな
自由とはときに淋しく昼寝覚

白岡 岡本和男

白木権供へ無言の祈りかな
時過ぎて待ち詫びたるや天の川
失はぬ仏の道や施餓鬼壇
人の不幸を背負うて木槿散りゆけり
物価高に秋の野菜を单品で

さいたま 小川洋子

素戔嗚を献る神輿荒れに荒れ
安楽死願ふ卒寿や御来迎
動かずば暑さ感ぜぬ暑さかな
風鈴や風の刹那を見逃さず
源氏名を貰ひ誇りと花菖蒲

さいたま 香田裕誌

夕焼空風に乗りゆく「海」の唄
石垣に藩の印や船遊山
充実す日本橋から遊び船
祭提燈町のあちこち風に揺れ
忘れ得ぬ奄美の銀河東シナ海

森下美智枝

雑魚寝の宿に青春ありき大文字
酔芙蓉眠れぬままに白と知る
虫干す忙しき日々のランドセル
虫干や指折り数ふ子ら来る日
酔芙蓉これが最後と紅をさす

吉川 杉浦千祐

波をうつ青田を裾に天守閣
葉隠れの青柿光る空の青
山滴る鳥も獣も子育中
子に語る幽霊話端居かな
被り物取りて一息青田風

湯浅 和

初蟬や都会育ちが農を継ぐ
花石榴野天風呂から槍ヶ岳
川床座敷瀬音奏づる貴船かな
銘柄で嗜む地酒花石榴
深山蟬生涯農の母の指

若狭 畠中風花

暑さには暑さの顔のありにけり
淋しさや暑さに抱かれるたる夕
ぎゆうぎゆうのバス懐に暑さ入れ
吾の町の懐かしさある暑さかな
着崩して歩く女の暑さかな

さいたま 吉川拓真

諸諸の明かりを消して銀河濃し
戦乱の地にも輝く銀河あり
座敷まで招き入れたり今日の月
コスモスや母と娘の小さき旅
事無きて厄日過ぎたる穂の重さ

森下風湖

灼熱の紅踊るフラメンコ
仲違ひそつと見守る秋の風
人の和が繋がり大き踊の輪
提灯四張り一族で行く盆送り
外干しの襦袢にそよと秋風が

川島夕峰

爽やかや野球で稼ぐ男たち
追ひつけぬ風の背中や桐一葉
首傾げ歌ふスターや鳳仙花
曲者の首脳会談秋暑し
原発の増設の是非残暑の日

松村笑風

峡の宿星爛爛と網戸越し
潮騒に三線の音夕端居
夕端居夕日に黒き津軽富士
胸で聴く島人の唄しまんちゆう 桑花
夕日溶くる土佐の荒海秋遍路

大熊健司

遠雷や眠る赤子の広がる掌
紫陽花や球体奥に慈雨宿る
草食むや膝折る山羊に青田風
分蘖の実りの予感青田道
水玉の滴る葉籬盛夏かな

さいたま 阿部貞代

かなかなは朝うれしと夕さびしと
朴齒履き白緋着て宵祭
終戦忌思ひ語らで逝つた父
庭仕事終へて水風呂冷し汁
縁台を知らぬ世代と将棋指し

駒谷行雄

ピーカンなのに形見の日傘さして行く
旅人よ息災ですか夕風鈴

大阪 遠藤人美

初秋や人肌の白湯すこし飲む
大文字風に還されゆくあかり
木槿忌や肴の並ぶ手塩皿

朝焼けや仙人遊ぶ寺にゐて
地藏群ひとつひとつに苔の花
雷雨あり破れ山門の大草鞋
涼やかに若きお大師夏の萩
聳り立つ修業の岩屋西日差す

東京 山中いちい

明易の参禅清し坊泊り

さいたま 石黒由美子

山滴る四肢に纏はる檜の香
夕端居黒髪を梳く阿六櫛
朝の雨昨夜のなごりの白粉花
土臭き雨の近づく残暑かな

立秋の山風纏ひ欲呼せり
トンネルを出て幾曲り秋の浜
新涼や裾分け合ひの隣組
真つ直ぐな兎の誓ひ聞く原爆忌
三百十万御霊追悼終戦日

若狭 西川昭代

青葡萄母子の集ふ助産院

上尾 室井早都子

おかへりとカレーの匂ひ網戸越し
夕焼や空より早き山の夜
嶺に立つ吾雲海の漂流者
雲海へ深く潜航ロープウェイ

体温を超えてまだまだ秋暑し
この道に今年も咲けり彼岸花
秋刀魚焼く煙と香り閉ぢ込めて
寒流に乗りて我が家へ初秋刀魚
角開き地上の星に白桔梗

さいたま 小駒さち子

月にそむき月下美人の一夜かな

さいたま 篠原さよ子

黒金の足場灼けるや櫓組む
ぼつてりと熟れ無花果でジャム作り
夏草刈り追ひつ追はれつ鎌を研ぐ
夏草の一雨ごとの活気かな

望月を鳴いて知らせる草の中
明けてなほ鳴く鈴虫や籠の中
地獄絵の鬼火に紛ふ酷暑なり
夏草に掠め取らるる庭の首座
肥大せし胡瓜そのまま畑休み

鈴木藻好

一男二女巢立ちし庭の鳳仙花
秋刀魚食ぶさんまと詠むは無粋なり
門を出でもうついで来ぬ赤蜻蛉
生粋の江戸つ子気取る蝸牛
ささくれの母さん指に秋茜

川口 新井のり子

花蜜柑香り纏へば青春期
微の香や夫の謡の和綴本
夕端居白の五弁の花ぼたり
夕端居風を肴にもう一杯
父母の墓見下ろすや青田波

さいたま 菅原靖子

かなかなに呼ばれし厨匂ひたつ
含み飲みひとひら残る暑さかな
照り返す残暑に揺らぐ影ふたつ
一塩に踊る秋刀魚や煙立つ
母の背を追ひて蛸どこまでも

さいたま 鈴木香音子

「城ヶ島の雨」の美しき転調初夏の詩碑
故郷の県展五月初入選
畑中のアトリエを訪ふ梅雨晴れ間
乙女らの歌声清ら夏の尾瀬
緑蔭の路地を辿りて再会す

宮代 関谷多美子

シチリアのマフィアのボスも鯛焼く
明日こそは朝顔見むと早く寝る
品格は大和撫子太鼓判
残る蚊や思ひ断ちきる大叩き
津軽富士裾野遍くりんご村

北山建治郎

憂鬱を残らず捨てに大花野
花野行く意気揚揚と野球帽
しつぽ振り犬友を待つ恋花野
播鉢にうちの一品とろろ汁
休肝日つい御代りのとろろ飯

さいたま 緒方みき子

野を紡ぐ川の曲りや曼珠沙華
四枚の自由な羽根よ夕蜻蛉
山と水神に抱かれ里祭
空は友海原は父月は母
眠れずにスーパームーン蒼きかな

所沢 関根千恵

大花野大波小波音のして
遍路路の花野に杖を清めたり
大花野休耕田を隠しをり
乳の出の良き嫁今日もとろろ汁
宿坊のゆるり過ぐるやとろろ汁

所沢 飯室夏江

桐一葉白髪の増えし兄の黙
数多より風に聞こゆる秋の声
見上ぐれば雲引く機影秋日影
亡き夫の鬘屑の店に吾亦紅
らふそくの芯の傾き寝待月

さいたま 小山あつ子

ダム枯れて雷神を待つ残暑かな
約束を先送りする残暑かな
星月夜遊牧民に思ひはせ
エレベーターに伽羅の残り香秋涼し
紫に爪先染めて食ふ巨峰

さいたま 稲野幸子

海の市目の美しき秋刀魚選る
海光を纏ひしままの秋刀魚かな
焦げ秋刀魚苦きを好む男をり
秋暑し鳥の声なき今朝の窓
秋暑し「火垂るの墓」の再放映

横山礼子

峰遠く祈りの一日秋遍路
信濃路の空の青さや山滴る
心太母の小言のあれこれと
白みゆく山に水音河鹿笛
白南風や海岸線を突つ走る

大神満智子

香を探る広がる口の酒中花よ
青田風抜け行く畦に握り飯
面立ちの堅き表情青き柿
列島の気温上昇原爆忌
無漏路から夫を迎ふる盃蘭盆会

武田重子

晩夏光父の形見の腕時計
晩夏光書き癖強き「モンブラン」
町中華の暖簾の染みや秋暑し
蛸や文机にあるインク壺
祖母の住む村の有線赤とんぼ

小野町子

蛸や前垂れ褪せし石地藏
蛸やかな女の句碑に鳴きはじむ
積ん読の一冊開き涼新た
ひとり欠けし遊び友だちほうせんくわ
焼き秋刀魚骨美しく夫の皿

羽島秀子

新涼や靴音響く朝の道
いつの間に秋色の風歩きゆく
栗ひとつまたひとつむきおこは炊く
窓辺に秋思十年一日の如し
波の間にゆれてかがやく海の月

三森恵子

ふんどしに祭り半纏水浴びて
ごろごろと雷様の落とし物
じりじりと草木も灼くる大暑かな
一仕事終へし体にまづビール
雲海の隙間に見ゆる我が故郷

東京 桐山遊童

早星今日も訪ぬる無言館
早星おれはいから孤児に水を
青林檎機嫌直らぬままの吾子
青林檎出番未だよと言はれけり
風鈴や眠る幼子包みをり

さいたま 門真宏治

古鳥居水に影置く晩夏かな
滝壺に修業僧の声とどろきぬ
雲の峰やうやく九九の言へる児に
夕立や供花の乾びし六地藏
パトカーの赤くるくると昼寢寛

さいたま 山下ユリ子

青林檎食む古きポップス聴きながら
青林檎初のルージュは珊瑚色
早星巨大クレイン黒黒と
水耕のバジル根を張り早星
ジャケットの包みボタンや秋を待つ

三浦真由美

野分中一人楽しむフルコース
線状降水帯招かざる客秋出水
紅玉や母の手作り焼りんご
ラ・フランス絵手紙にして礼状に
空の青もらひ散り咲くつゆ草や

東京 清水美千子

いつ割れし桔梗の風船音もなし
撫子や一心に天顔を上げ
本日は処暑当日や気配なし
食べ頃か太った秋刀魚と見つめ合ふ
大青蜂好みの蜜や女郎花

小田三茅

夏帽子斜に見上げたる剣岳
剣岳向かひてすくと小鬼百合
須佐之男の眼光猛きねぶたかな
ねぶた祭り山車の曳き手もブイサイン
仮名文字の筆跡流れ女郎花

さいたま 伊藤美津子

温暖化に喘ぐ地球や早星
米の値の下がらぬ気配早星
若き日の杓子定規や青林檎
青林檎あんぐりと食む歯列かな
包装紙で選ぶ残暑見舞かな

木谷葉子

初秋刀魚糺り人たちの手鉤かな
秋刀魚焼けのせるお皿の出番かな
凜として残暑のスーパー介助犬
くひ込みし肩のリユツクの残暑かな
秋めくや犬と遊ぶ子真つ黒け

さいたま 樋口元美

ピラカンサ折られし枝になみだ跡
折られても尚逞しきピラカンサ
蔓の手を優しく抱きしピラカンサ
ピラカンサパチリ壁紙室とし
赤き実を優しくさらふ鳥愛し

榎本道代

無作法に大口開けて西瓜食ふ
盆僧の朝日に光る小鉤かな
出目金ものたりのたりの猛暑かな
毛虫焼く美女は般若の面付けて
青田風眠る赤子を撫ぜゆくよ

和歌山 嶋田洋子

草のなか蔓引きよせて南瓜かな
溝萩も枯れかかりけり今朝の空
葛の這ふ墓や隣の人見えず
ゲルニカの嘆き終らぬ原爆忌
星空へバベルの塔かピルの群

鬼石 榊原聰子

討論のつきぬ夜もあり青林檎
青林檎かじりて胸のつかへかな
病院の窓薄暮れて早星
早星スコップころがる砂場かな
蜻蛉や小包送り便り乗せ

さいたま 今西 操

秋めきてシヨーウインドーより色付けり
墓参り眩き多く木々の揺れ
八月の水面かすめて風の音
朝顔の紺の大輪極みけり
去ぬ燕命つなぐる太き梁

東京 柳父はる

昔大川熱されて葛の花
残暑長し値段シルの重ね張り
観光の群れ現れて日傘差す
駅ごとに水を一口夏の旅
滝川に釣や石投げ猿酒

横浜 石井妙子

デフリンピック手話の特訓処暑の夜
吾亦紅控へ目な人会釈して
日が暮れて音符のやうに吾亦紅
猛暑なか墓石に注ぐ井戸の水
新涼やヨーグルトにきな粉混ぜ

さいたま 田口文子

目覚むればTシャツびつしより夏の午後
夏の花ステンシルする布の上
白靴を買ひに一駅乗つてまで
熱帯夜津波避難の夢を見る
死神も通り過ぎたる夏の夢

藤 沢 小島喜代子

蚰やダムの水嵩案じをり
街路樹は色なきままの極暑かな
残暑かな遮熱カーテンの薄明かり
エアカーテン雫の壁の猛暑かな

草 加 持永喜夫

浅瀬行く水牛の背やハイビスカス
拔露地や白粉花のおせんぼ
髪一本顔にまつはる残暑かな
そぞろ旅雲海もまたとどまらず
とかげの子逃げる構へで現はるる

さいたま 六戸洋子

青春は遠き轍よばらの棘
鈴虫や遠近競ふ夜の友
朝顔や好みの紅の美人顔
時折にこちよき風残暑の夜

さいたま 糸井しるく

八月や地球沸騰しないかな
警報の鳴りし夏の日友と会ふ
残暑厳し留学先も同季節
亀強し猛暑の中の散歩かな
夏の朝珍犬庭に現はれる

和歌山 南條きわゑ

百日紅ソナチネソラシド風に問ふ
蛇崩れで次会へるのは何時蟬時雨
息荒く声弾ませて金魚すくひ

東 京 中村まどか

幼子の化粧のやうな天瓜粉
沸かしても沸かしても減る麦茶かな
吾は葱夫は紫蘇のせ冷奴
居酒屋で最初に頼む冷奴
青紫蘇の色美しき冷さうめん

大 阪 海老名ノルン

作品鑑賞

山本鬼之介

手放せぬ本を手厚く曝書せり 丸屋詠子

夏の土用の晴天の日に、衣類や書籍・書画・骨董品などを陰干しにして黴や虫の害を防ぐことが昔から行われてきた。

和服中心の生活であった時代には、部屋に紐を張って着物を干し連ねる光景が見られたようだ。和服を常着とする生活様式が無くなった現代では、むかしに隣近所で同時に行っていた秋の大掃除と同様に、衣類の虫干しは無論のこと、一般的な虫干しも少なくなっただと思うが、そのような環境の変化が余儀なくされてきた現代において、俳句の季語を通じてむかしの生活習慣に接することが心のゆとりになると思う。

それほど熱烈な読書家でなくても、二、三十年の年月の間にはかなりの本が溜まるであろうし、金銭的な価値は少なくても、持主にとっては価値の高い本もある。掲句の「手厚く」がそのことを如実に示している。持主の思いの籠もった本の数々を丁寧な敷き並べて曝書すると、本の文字一つ一つが生き生きとしてくる。本の持主と生涯を共にする本である。

本郷に残る旅館の作り滝 小林京子

この句に触発されて調べてみて、東京都文京区本郷には予想以上に多くの旅館があることを識った。中でも夏目漱石や森鷗外らの文豪に愛された「旅館鳳鳴館」の本館は、築120年以上の歴史があり登録有形文化財になっている。

さて、本郷に今も残っていて作り滝のある旅館の館名までは特定できないが、作者の心に焼き付いている旅館なのだと思う。東京都北区王子にある「名主の滝公園」の男滝のような大きなものでなくても、利用客が居ながらにして滝を見られるとなればアピール材料になる。

曝書する昭和レトロの「火の鳥」を 倉田星歩

漫画家アニメ映画監督として著名な手塚治虫の漫画は、昭和を象徴するものの一つとして多くの人の心の中に生き続けており、筆者もその一人である。疎開先の若狭から戦後の復興途上であった東京に戻り、編入した小学校の同級生が持っていた手塚治虫の漫画本（多分初期の作品である「新寶島」であったと思う）にすっかり魅了されてしまい、買い求めたかったが街の書店に予約してもなかなか入荷しない時代であった。作者も「火の鳥」の虜になった一人で、今以て毎年曝書の大スター本なのである。

山間の一村包む天の川 岡田宣子

一読しただけで天の川の雄大さが手に取るように伝わってくる。その長さといふ幅といふ申し分なく、「包む」がびつたりの表現である。戸数が二十も無いような山村が、眺めていてうっとりする銀河に包まれて眠っている。何と素晴らしき景色であろうか。夢のような夜の時間が過ぎてゆく。

蝸牛ゆるり進めば海の見ゆ 菅原真理

新潟県出身の作者には、日本海への憧憬の念が強い。日頃時々頭をもたげる望郷の念は、そのまま日本海へ繋がるのである。今回は、自分の気持を蝸牛に託して俳句にした。観察していてもどかしくなる蝸牛の超緩慢な動きであるが、少し目を離している間に視界から消えていることがあり、まさに瞬間移動の超能力を備えているように思えてくる。自分の熱い思いを蝸牛に託した傑作と見た。

神鳴や両面打ちの大太鼓 皆川更穂

「かみなり」に「神鳴」の漢字を配したことで、「雷神」に繋がる。鬼のような形相で虎の皮の褌を履き、輪形に連ねた太鼓を背負い、手に桴を持っている。

祭かライブで、大和太鼓を両面打ちしているのであろう。折から、暗雲に覆われた天空では耳を劈くような雷鳴が轟いている。「雷公にゃ負けられん」と太鼓打ち二人が力む。

時の間の風にこぼるる稲の花 岡本祥子

掲句を読んで改めて「米の花」が他の花とは全く違う特性を持つ花であることを認識した。花の咲く仕組み、花が咲く時の気象条件、花の咲く時間帯などから、実に繊細で短命な花であることを識った。そういう花であるからこそ「時の間の風」の表現が活かされるのである。米づくりに従事してその花に歓びを抱き、花のはかなさを識っているから出来た俳句であると思う。詩情あふれる言葉「時の間の風」が読者を唸りの田へ誘う。

天領でありし薨や秋祭 田中弘子

天領には、天皇直轄と江戸幕府直轄があるが、筆者の推測では後者であると思う。明治維新から二百年近く経過した現代では、そこに居住する人々にとって天領とか大名領とかの意識はなく、昔々天領であったこの地において、いま盛大に秋祭が催行されている。しかし、当時の大社か古刹の薨に徳川の葵の紋が標されていることでその地の歴史が甦ってくる。「天領でありし薨」はなかなか意味深い言葉である。

尾を残し足取り軽く蜥蜴の子 寺町知子

蜥蜴は自分で尾を切つて敵から逃れ、その尾は再生するという不思議な習性を持っている。子蜥蜴も早々とその習性を

身につけていると識ると興味深い。その子蜥蜴は作者を外敵と見たのだろうか、それとも他に敵と見なすものが居たのか。「足取り軽く」が、子蜥蜴のとほけた様子を演出している上手い。

火の色に染まりゆく街佞武多来る 霜多光代

青森の場合、夜七時から大型の組み佞武多が動き出し、時間の経過とともに跳人の人数が増え、街中が興奮の坩堝となる。電光によって照らし出された極彩色の巨大な武者絵が跳人を奮い立たせ、見物人を活気づける。上五から中七のフレーズが、ねぶた祭の臨場感を遺憾なく表している。

笥迫の朱色きりりと六月の婚 阿部幸代

花嫁が幸せになれるというジューンブライド。純白の和装花嫁衣装に朱色の笥迫は実に見映えのよいものであり、人生における大切な儀式での花嫁の心の拠り所にもなる物ではなからうか。日本の四季が大きく崩れている近年ではあるが、朱色の笥迫が婚礼をリードしているように思えてくる。

日の盛鬪牛告ぐるファンファーレ 反町 修

牛闘士が鬪う鬪牛は日本でも行われているが、ファンファーレの言葉から、この句の鬪牛は、スペインで鬪牛士と牛が繰り返る鬪牛と判断した。真夏の太陽に灼けるマドリード

のラス・ベントラス鬪牛場。ファンファーレが鳴り響き、マタドール（鬪牛士）が登場し、やがて気の強そうな牛が入ってくる。マタドールがムレータ（赤い布）で牛を挑発し、見せ場へと展開してゆく。近年では、鬪牛の残酷性が問題視されているようだ。

どこまでも同じ金魚を狙ふばい 本橋稀香

金魚掬いを題材にした俳句である。一個のぼいで如何に沢山金魚を掬うかが金魚掬いの楽しみで、当然のこと一個のぼいを出るだけ長持ちさせる方法を会得することが肝要である。そして、掬いやすそうな金魚を見分けることも大事な要素であろう。しかし、この俳句の人物は金魚掬いを楽しんでるのではなく、特定の金魚を恰も仇のように追い続けている。その姿は、手負いの熊を追いつけるまたぎのようだ。

かなかなの時折揃ふ城の址 石関六弦

あの哀調を帯びた蜩の声は、夏から秋への季節の移り変わりを感ぜさせてくれる。日暮時の蜩がよいが、夜明けの声もまたよい。西空を夕焼が染める頃、独り城址に座して蜩の声に耳を傾けている旅人である。違う方向で鳴いていた蜩の声が、まるで申し合わせたかのように揃うことがある。まるで、旅人の心を癒やすように……。

お代はりと母に差し出す帰省かな 元田亮一

久し振りに故郷の実家を訪ね、年老いた母と夕食を共にした。話に華が咲いて食が進み、大きな声で飯と味噌汁のお代りをした。「まるで子供の頃と同じだね」と母が笑った。和やかな晩夏の夜が過ぎてゆく。

家犬の上座に臥する大暑かな 秋谷風舎

屋内で大事に飼われているペット犬である。夏の真つ盛りであるから、日中は冷房の利いた部屋で昼寝をむさぼっている。まさにお犬様である。主が座ろうとしたソファアの一等席をすでにお犬様が占領している。

夫婦喧嘩をビールの泡の希釈せり 飯田忠男

まさか取っ組み合いの喧嘩ではなからうが、かなり激しい口喧嘩であったのか。夫が苦り切ってビールを飲んでいたら妻が寄ってきた。夫が仕方なく差し出したビールを黙ったまま妻が飲む。その内何となく険悪な空気が和んできた。

盆踊り輪の中心は婦人会 畑宮栄子

広辞苑で「婦人会」の意味を調べてみたら、なかなか立派な五項目の目的が列記されていて、その真ん中が「娯楽」であった。町の住民が楽しむ盆踊りであるが、踊りの輪の主要メンバーは、ちょっと恐ろしい婦人会の面々であった。

大文字恋の終はりを乗せて燃ゆ 前田夏野

実らずに終わった一夏の恋の傷みを胸に、大文字焼の当日東京から訪れた女性。燃え盛る大の文字に恋の残骸を投げ入れたが、さて、彼女の心の霽は霽れたであろうか。

モノクロのビルの裏道緋のカンナ 綿引まりこ

表側のような飾り気の無いビルの裏側に面した道を、緋色のカンナの花束を抱えた人が歩いている、と解釈したが、如何であろうか。モノクロと緋色の対照がよい。

夏の山従へ出雲大社 平野 楽

あの巨大な注連縄が参拝者を圧倒する出雲大社であるが、伊勢神宮とは違った神々しさがある。「夏の山従へ」のフレーズが、出雲大社の特質を表現している。

「ごめんね」と担架の妻の目に秋思 森下山菜

脚を骨折して救急車の担架に乗せられた妻。同乗した夫に一言「ごめんね」と呟いた妻。日頃はなんだかんだと口喧嘩の多い夫婦であるが、今度ばかりは妻も殊勝顔で、目尻に泪が滲んでいるようだ。「秋思」は夫の照れであろう。

水琴窟

(水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

覚えたての校歌あやふや葱坊主

室井早都子

「覚えたての校歌」とあるので、入学したばかりの新入生であろう。校歌を教えられて間もないので歌詞もメロデーも「あやふや」である。今でも懐しい思い出である。子供、あるいは孫のことを詠んでいるのかも知れない。葱には節がないこともあり、「葱坊主」の取り合わせが絶妙である。

夏めくや炭酸の泡きらきらと

北出久美子

「夏めく」は、どことなく夏らしい気配が漂うことで、それを「炭酸の泡」の「きらきら」と輝くように見えた小さな現象の中に感じたのだ。草木ばかりでなく、日常の暮らしの中にも夏めく気配を察する感性を称えたい。詠み了へた句に満足せずに語順を変えるなど、そのちがいの検証を推める。

薄暑かな金の鮭鉾反り返る

山中いちい

上五の「かな」の型は例句にもあまりみられない。それは、結論を先に言ってしまうので、取り合せが倒置法に頼るからであろう。「金の鮭鉾」とあるので名古屋城であることが明らか。心地よい「薄暑」に反り返ったと感じたのだ。

詰め襟のボタン外して初夏の風

森下風湖

中学生、高校生になると男子は詰め襟の学生服を着用する。新学期は緊張していたが、五月、ようやく慣れてきて、「詰め襟のボタン外して」暑さを柔らげる余裕さえできてきた。多感な少年の心理がよく現れている。「初夏の風」に、青春の初々しき、活力がみごとに表現されている。

ジャムにする実梅秤に山積みす

緒方みき子

豊作の「実梅」であろう。梅干しにするだけでは余ってしまうので、「ジャム」を作ることにした。完熟した梅を選び、秤で量っているのだ。「秤に山積みす」にその意気込みが感じられる。特製のジャムは格別に美味しいものであるうし、梅干しも同様、今年もうまくできたにちがいない。

夏祭いなせ漢のふくらはぎ

小山あつ子

「いなせ」は、いきで若々しいこと。「夏祭」にぴったりである。その象徴として「ふくらはぎ」を注視している。本来、京都の「葵祭」を「祭」といい、その他諸社の祭を「夏祭」としてきたが、今は夏の祭を総じて「祭」という。

筍煮る義母の味にはまだ遠し

清水美千子

食材の旬には「母の味」を詠んだものが多い。それほど母の味は奥深く、同じ味にしようと努力を重ねている。味の秘訣はあく抜き段階からあるのかも知れない。「義母の味にはまだ遠し」の謙虚さが味を引き立てるにちがいない。

童わらわへ

童に囲まれればあば兜折る

嶋田洋子

孫の友だちが遊びに来ていろいろのだから。普段から折紙をして相手をしているのだ。五月五日の子供の日。童から「兜」を折ってよとせがまれた。「童に囲まれればあば」のうれしそうな顔がうかがふ。近ごろは兜を折る人が少なくなつた。

朝の 一服新茶の香健やかに

田村福美

清々しい朝に新茶をいただいている。風味も香りも新茶は格別。「朝の一服」で「健やかに」過ごす幸せをかみしめている。倒置法の工夫がみられるもの、流れをよくするため「健やかに朝の一服新茶の香」にしてはいいかがか。

退院日眩しかりけり柿若葉

門真宏治

長かった入院生活もようやく快癒し、退院できることになつた。その「退院日」は快晴で日射しが眩しい。「柿若葉」のつやつやと明るい緑が、退院を悦ぶ心境に重なっている。

更衣母の仕立ての馴染みたる

木谷葉子

洋裁をやっていた母であろうか。「馴染みたる」であるから大人になつてから仕立ててもらつた服なのだろう。体にびつたりと馴染む寸法、そして、馴れ親しむ二つの意味があり、いずれにせよ、それはそれはとても着心地がいいのである。

あのシテは隣村の子青田風

石井妙子

能・狂言での主役を「シテ」という。各地で催される野外能であろうか。農村地では高齢化がすすみ老人ばかりで子供が少ない。「隣村の子」にシテを演じてもらうことになつた。「青田風」から、みごとにシテであつたと想像する。

柔らかき光まとひて柿若葉

今西 操

「柿若葉」はうす緑の光沢のある葉で、ひと際明るい。それを「柔らかき光まとひて」と表現したところに趣がある。一方で、「柔かい」「光る」はこれまでに多く詠まれていることを認識しておかなければならない。佳句から学びたい。

蜜蜂に攻撃喰らひ藤揺れる

中村まどか

「蜜蜂」と「藤」の季重なりはさておいて、藤花の蜜を吸う蜜蜂のせいで揺れているという発見を評価する。房の長い藤は揺れ易い。「蜜蜂に攻撃喰らひ」が独創的である。

句集喝采

菅原卓郎

◆国光六四三「絵 図」

ほむぎ出版

著者略歴 昭和三十三年兵庫県生。平成二十二年「円虹」入会。平成二十六年「街」入会。平成二十七年山本健吉評論賞準賞受賞。平成二十九年「玉梓」入会。平成三十年「いぶき」入会。令和三年「草の香句会」入会。俳人協会会員。ブログ「六四三の俳句覚書」

作者の第一句集。「六四三の俳句覚書」というブログを立ち上げ多岐にわたり活躍中。俳号の六四三（むしみ）は六道庭掃いてただそれだけの盆仕度

鶉つかひの烏帽子の下のけもの貌
大根引臂を濡らして帰りけり
禅僧の踵のあつみ赤かぶら

忙しい。一定の年代になると簡素に済まそうと気になってくる。作者は庭の清掃を以て先祖をお迎えする。敬う心は決して捨ててはいない。第三句、喚かし大ぶりの大根である。中腰で思い切り大根を引き抜く。大根を握ったまま仰向けにひっくり返す景が妙に滑稽で実験である。アコーデオンの奏者の孤独青時雨

哲学の道と出合ひし蟻の道
甜瓜むけば甘き香あらはとけ

第二句、甜瓜の魅力は香りである。剥けば猶更で甘さと共に香りも頂きたい。新盆でお帰りのなった精霊を手厚く持て成す気遣いが良く出ている。第四句、郵便料金が値上げにならない。返信を心待ちにして過ごす日々が又楽しい。

◆「四季吟詠句集39」

東京四季出版

本書は令和六年一月号から十二月号まで「俳句四季」の四季吟詠編で特選を得た作家による合同句集。当水明より越田栄子並びに篠崎紀子の両氏が各々五十七句を掲載している。

古木には古木の力梅咲けり
鴨引くや風にリズムの生れし日に
風引くや風にリズムの盛りなり
小夜時雨淡き記憶の子守唄

越田栄子さんの作品。第一句、我が家の梅の木も見た目かなり草臥れているが、時期が来れば見事に花と香りが全開となる。自然の計り知れない力を感じる一句。古木を侮る莫れ。第二句鴨が北方に帰る頃、今まで風には寒さしか感じなかつたが徐々に風に動きが出て来た。軽快なりズムに乗って風が暖気を運んでくる。春の開放感と明るさが滲み出てくる。明るく澁刺とした句が多く、作者の人柄が出ている。

山中やどの子の面も朴落葉
終の地に桃の花咲く日和かな
人ありてこそその里山鳥帰る
肩書を捨てて土用鰻にかぶりつく

篠崎紀子さんの作品。第二句、桃の木が有る終焉の地に春がやって来た。花をあと何回愛でる事が出来るのだろうか。ちよつと淋しさが有るがそれより春の良き日和を楽しむようにする前向きな姿勢が感じられる。第四句、人間の食欲には肩書、性別など関与しない。特に土用の鰻とくれば猶更である。浦和は鰻の町。うなちゃんにもにんまり微笑んでいる事だろう。

句集喝采

菅原卓郎

◆山本一步「春の山」

本阿弥書店

著者略歴 昭和二十八年岩手県生。昭和四十八年「水引句会」入会。昭和五十二年小林康治に師事。昭和五十五年「林」創刊同人参加。平成八年第四十二回角川俳句賞受賞。平成十年同人誌「笹」を一步主宰誌に改変。平成十二年第二十三回俳句協会 新人賞受賞。「笹」主宰。俳句協会会員。日本文藝家協会会員。

「平明な言葉で」をモットーにしている作者の第六句集。因みに「春の山」は出身地岩手の早池峰山との事。

浮くでもなく沈むでもなく瓜冷ゆる
豊年の大きな声の僧侶かな
拭ひたる袖子湯ぐもりの鏡かな
山焼きし昂り揚舟にて冷ます

第一句、瓜系の作物は並べて中途半端である。決して沈みはしない。でもぼつかり浮くわけでもない。河童の背中を思い起こす。第二句、稲がたわわに実れば村全体が賑わって行く。坊さんも俄然勢づいてくる。やはり豊作が何よりである。

祭髪昼餉のむすび配りある
霧の出てをりし牛舎の中までも
輪飾りやかしの古釘を待みとし
下萌を促す杖を突きにけり

第一句、髪をおだんごに纏めた女性が男衆に握り飯をふるまっている。隣発力を出すには炭水化物に限る。第三句、輪飾りを主だった部屋に飾っていくのだが、亡父が打ったであろう釘を吊り下げる。釘を打つ父の姿を偲びつつ飾るのである。我が家では輪飾りを吊るす習慣が無くなったのは何時ごろからだろうか。記憶の彼方である。

◆岩本功志「マールウ橋」

志岐坂書房

著者略歴 1943年鳥取県生。1960年水川丸にて渡米。2012年「野火」入会、菅野孝夫主宰に師事。2016年「野火」同人。俳句協会会員。

マールウ橋はテムズ川に架かる吊橋で歩行者の利用が多い。エドワード三世時より現在地にあり、亡くなった奥様との思いでの地である。レガッタの櫂の音が聞こえてきそうだ。

竹はせて火の粉を宙にどんどこかな
阿蘇五岳外輪山に野火あがる
病床の妻と二人で聞く花火
行く雲や釣瓶落し逆さ富士

第三句、花火は見るものである。意に反して聞かざるを得ないもどかしさ。でもせめて音だけでも聞かせてやりたい。作者の感情が滲み出ている一句。第四句、行く雲と季語が見事に富士の夕刻の景の移り変りを醸し出している。

小春日や子犬を乗せてベビーカー
釣宿の浅き眠りや冬の波
凷や砂丘の駱駝まぶた閉ぢ
ジブシーの熱き踊よ燃ゆる目よ

第二句、太公望の殆どが釣り宿での睡眠障害に陥る。子供の遠足前夜状態だ。作者は波のせいにして行っているが、決して原因は冬の波ばかりでは無いはず。第四句、海外勤務が長かった作者ならではの一句。情熱的な舞をフィッシュユアンドチップスを食べながら奥様と見ていたのではないだろうか。

大村節代 選

鼓笛集

日捲りの薄さに気付き秋めきぬ

岡田宣子

池の泥掬ひて秋の水満たす

ペンションの硝子の花器に山葡萄

山の湯を炎と化せり鶏頭花

切通し過ぐれば光る緋鶏頭

どこまでも靴跡著き秋の浜

霜多光代

ちちろ鳴く三年日記閉ぢる頃

逝きし友また一人増え今年酒

秋簾独りよがりの一人酒

元田亮一

十六夜の月を呼ぶかに白桔梗

飯田忠男

月に影あれはかぐやの牛車かな

ゆらゆらと吾も吾もと吾亦紅

桐一葉老いを知りたる八十路かな

反町 修

淡麗や差しつ差されつ今年酒

淡々と辿る八十路や秋の空

葛原に葛布の夢を手繰り寄せ

阿部幸代

風向きの変はる頃ほひ葛の原

秋の蜂厨の窓を覗きけり

二十歳の日々花野一面レモン色

森下山菜

相撲取手には嫁御のちひさき手

隕石の燃えて真つ赤な曼珠沙華

かまきりの揺れてギョロリと死のダンス

北山建治郎

かまきりの葬送曲や鎌を研ぐ

かまきりの泡の卵は子沢山

小紋着て読経を聞くや菊供養
すれ違ふ袋の香りべつたら市
ハロウイーン 国中の笑み街に満つ

秋谷風舎

褒められも手折られもせず草の花
悲しみを高く投げ上げ秋の空
秋茄子や水も光も跳ね返し

山中いちい

秋暑しあげ髪たばね赤りボン
敬老日幼稚園より招待状
雲わきて秋茄子の花盛りなり

榊原聰子

井の頭カフェのガレット蕎麦の花
秋の浜真珠の指輪残されて
のら猫に好きな人の名日向ほこ

綿引まりこ

オパールなる指輪九月の道具市
もつれつつ落ちゆくばかり秋の蝶
夜更けては帰巢の鳥へ虫の声

遠藤人美

誰も来ぬ客間を照らす盆灯籠
運動会たがひにねぎらふ教師かな
秋涼しリアルな寝ごと母の顔

新井のり子

秋ともし人恋しくて文を書く
秋ともし音を潜めて頁繰る
葉鶏頭一刻者の空威張り

湯浅 和

田の水路ザリガニ採りに子ら夢中
往年の名曲に酔ふ晩夏かな
青葡萄実り竹林夕暮るる

関谷多美子

窓辺より光の便り秋日和
万物の色やはらかに秋日和
供花を手に登る坂道秋日和

横山礼子

赤まんま妣の何度もする話
秋惜しむ光の午後も星の夜も
叢雲に見え隠れして月の夜

小山あつ子

鳥威し見抜く仕草や村雀
不揃ひも身振りの技や盆踊り
温め酒旅の孤老を染め上げて

香田裕誌

部屋香る一輪挿しの花蜜柑
切り紙の干支と並びし水中花
一面の青田の波を旅の窓

武田重子

鼓笛集作品評

大村 節代

日捲りの薄さに気付き秋めきぬ

岡田宣子

卓上に置いて、格言等を読んだりして一月一日から愛用した日捲り。一日の終りに、今日もつつがなく終ったと一枚はぎとった日めくり。秋に入りふと日めくりの薄さに気付き、あんなに厚かった日めくりも薄くなり、今年の過ぎ去った日々を思い残された日はあと何日かと思っている感無量な思いが伝わる。

どこまでも靴跡著き秋の浜

霜多光代

どこの海か分らないが、この句から砂浜の白さと美しさ、秋の空の青さが浮かぶ。夏場賑わった海浜だったが、秋になると犬をつれた散歩の人が時折訪れる位で、まことに静かである。

夏の喧騒はどこにもなくゆつくりと潮風を浴びて、海と空と砂浜を独り占。

ちちろ鳴く三年日記閉ぢる頃

元田亮一

一番の日捲りの句と通じるものがある。両句共に、日記帳の残り頁によって、行く年の秋の寂しさを表している。

三年日記を大事に記していたのだろう。今年はその日記の三年目となり、残りの日々はこれだけという感慨が伝わる。ちちろ虫の季語が何とも合っている。

鼓笛集巻頭(四月号)

私の好きな一句(自句自解)

倉田星步

落ちかかる棹を支ふる首領雁

私の町には毎年多くの渡り鳥が飛来する。数年前の十月下旬頃、町外れの利根川上空を一列に二十羽近くで飛んでいた雁が徐々に疲れたように先頭から高度を下げていく。そんな中で先頭の雁が持ち直し高度を若干上げると続く雁も少しづつ高度を上げていく。雁は先頭のリーダーが群れを励まし、ときには交代しながら助け合い、数千キロを飛来するという。そんな感動的な風景である。

誤植訂正

誤植がありました。お詫びして訂正致します。

合併号「季音月」欄下段

正 雷鳴に句会どころでなくなりぬ

誤 雷鳴に句会どころでなくなりぬ

合併号四四頁上段

正 辻田克己

誤 行方克己

水明例会案内と例会報の第一例会幹事

正 菅原卓郎

誤 小林京子

誤 茂木和子

誤 小林京子

『俳句四季』

九月号

作品8句

秋あはれ

青木鶴城

〔水明〕

終戦を早も忘るる九月かな
必ずの約束なんて青蜜柑
秋高し二杯目はブラックで飲む
赤蜻蛉人差し指の遊ばるる
諍ひの無き世を生きて残る虫
秋扇灯火親しむべきもなし
告白を呪文のやうに祭の夜
壁の染み時に預けて秋あはれ

水明通信

さいたま市 榎本道代

先日届いた「水明9・10月合併号」は、水明創刊95周年記念作品をはじめ水明年譜など盛り沢山で、実に読み応えのある一冊でした。

中でも、水明各賞受賞者の皆さんの作品は、どれも素晴らしく感動致しました。ご受賞された皆さん、本当におめでとうございました。

私は最近、投句の間口を広げるように心掛けています。

投句の先は、全国紙・誌や松山市が運営する俳句サイトなど様々ですが、それぞれの媒体にはそれぞれの特色があるので、投句の中も広がります。

掲載の有無は別として、挑戦し続ける自分でありたいと思います。

水明創刊100周年を目指し「まだまだこれから」との気概で投句に励んでまいります。

セロ弾けば隣の犬が歌ふ夏

網野月を選

山紫集

甘言にかまきり鎌が下ろせない

篠崎紀子

女螳螂肘にバッグを持つ風情

森下山菜

螳螂を箒にのせて外に出す

元田亮一

螳螂や元より笑ふこと知らず

山戸美子

——以上特選

螳螂や子を産むものが世を造る

川島夕峰

螳螂や前足舐め研ぐプロローグ

北山建治郎

螳螂も少年もすぐ身構へる

内田恵子

螳螂の武器が重くて戦へず

瀬戸雄二郎

螳螂や子らの遊びに遊ばれし

糸井しるく

首曲げて怒る螳螂鎌使ひ

倉田星歩

螳螂のぬつと見てゐる雨のおと

石関六弦

方丈の螳螂の斧見守りぬ

小駒さち子

螳螂や夜の孤独に鎌を折る

吉川拓真

螳螂の目爬虫類めく白昼

小林京子

円らな瞳しやいに構ふる祈り虫

河野はるみ

螳螂の鎌振り上ぐる殺気かな

小山あつ子

蠨螂や寄らば食ふぞと鋭き眼	近藤徹平	蠨螂とかちつと眼玉合ひし時	菅原真理
網戸ごし大蠨螂ににらまれし	榊原聰子	かまきりに飛ばれ涙のわけも跳ぶ	杉浦千祐
鎌切の翔びて怒りを収めけり	佐々木史女	蠨螂と話す童の真剣味	鈴木藻好
蠨螂の威嚇に猫も後退り	笹本啓子	三角の蠨螂の眼の睨みをり	鈴木玲子
蠨螂の生きるに重き己が鎌	穴戸洋子	竹群とふ瀟灑なる家青蠨螂	関谷多美子
蠨螂のふんぞり返る流儀かな	篠原さよ子	蠨螂の何に怒るか仁王立	染谷風子
蠨螂の鎌ふれば吾白刃どり	渋谷きいち	某国の喧嘩殺法いぼむしり	反町 修
蠨螂や目玉ギョロりと葉を食 ^{はむ} や	嶋田洋子	蠨螂や野仏の足を拝みをり	高橋満耶子
蠨螂の顔つくづくと哲学者	清水桂子	蠨螂と遊ぶ吾子の手ぎこちなし	武田重子
虫好きの先生の笑むいぼむしり	下川光子	蠨螂や針金虫の機嫌見る	田中章嘉
金山掘る鉞夫のさまやいぼむしり	霜多光代	蠨螂の斧上げしまま枯れあはれ	寺内洋子
蠨螂の影に慈悲あり聖母像	菅原卓郎	蠨螂の行こか戻るか思案中	寺町知子

蠨螂や威風堂堂草の上	飛永 鼓	雄かまきり果てる眼に写るもの	福田千春
蠨螂や高尚な人崇拜す	南條きわゑ	蠨螂に挑むタトゥーの大男	保坂翔太
蠨螂の鎌振り上ぐるつらがまへ	西幅公子	蠨螂の百頭身が睥睨す	曲淵徹雄
浅緑まだ頼りなく蠨螂子	野口和子	蠨螂や女系長寿の無敵なる	正木萬蝶
蠨螂を棒で突くや子等遊ぶ	野村美子	無手つ法な鎌に対ひしいぼむしり	松宮保人
蠨螂の鎌で刈りたし邪悪心	畑宮栄子	蠨螂につき従ひて参道を	丸屋詠子
かまきりの悲しき性や生と死と	原田自然	吾に対す眼に戦意いぼむしり	丸山マスキ
蠨螂の棒振りに似てセイジ・オザワ	原田秀子	逃げ延ぶる雄になりたき疣毛り	皆川更穂
蠨螂の戦鬪ポーズ草に立つ	樋口元美	スマートな姿態軽々いぼむしり	宮崎チアキ
菩提心蠨螂鎌を摺りあはす	日高道を	草の闇蠨螂の鎌ゆるゆると	持永喜夫
蠨螂や人それぞれにある正義	檜鼻ことは	蠨螂のかつと拡ぐる夜会服	本橋稀香
蠨螂や夫婦を契り身を捧ぐ	平野 楽	幼子に蠨螂斧を振り廻す	森 和子

墓石の蠅螂我を迎へをり	森下美智枝	いぼむしり塀を舞台に見得を切る	荒井俱子
縁側やぬつと出会すいぼむしり	山岸久美子	草葉した匂ひに溺るいぼむしり	新井のり子
蠅螂の片足のみや夕ぐもり	山下ユリ子	蠅螂の海芋の茎に溶け込んで	飯田忠男
人ごとき分別ありやと問ふ蠅螂	山中いちい	葉隠れにパントマイムかいぼむしり	池田珪子
薄翅でもあれよあれよと飛ぶ蠅螂	湯浅 和	蠅螂の思案する振り死んだ振り	石川理恵
蠅螂の気魄あふるる小顔かな	横山君夫	スコップと赤い軍手に子かまきり	石田慶子
蠅螂の物欲しさうに貌廻す	横山礼子	蠅螂の草に紛れてまぎれぬ目	池田雅夫
表札に我が主と蠅螂が	綿引まりこ	猫目線両鎌挙げていぼむしり	梅澤輝翠
肘先で見送る妻やいぼむしり	青木鶴城	染み染みと哲学者めく青蠅螂	梅澤佐江
葉隠れの蠅螂斧の居合かな	秋谷風舎	古疵も生疵も傷いぼむしり	遠藤人美
蠅螂や筆振り翳すピカンかな	新 曆文	印を結ぶ菩薩の御手にいぼむしり	大場順子
草深し蠅螂鎌を上げ拝む	阿部幸代		

山紫集作品評

網野月を

蠅螂も少年もすぐ身構へる 内田恵子

「蠅螂」の見た目を「少年」の心の構えと比した句である。「蠅螂」を見てみると「少年」の心の在り様を想起したということであろう。この場合「少年」は一般論ではなく、作者の作句の意図の中には、具体的な人物があるのであると推察してみた。そうするとより具体的に、その「少年」の性質の繊細な部分や体つきや顔の表情まで読者は想像でさるよう思う。読者によって異なる「少年」を想像するのであるが、誰しも身近にこの「少年」なる存在を有しているのではないだろうか。

ボクシングのダウン後のファイトポーズを思い浮かべてみた。

蠅螂の武器が重くて戦へず 瀬戸雄二郎

中七座五の句意は「蠅螂」のことなのか、それとも「蠅螂」を見ながら作者が自らのことを顧みての感慨なのか。上五の「…の」働きをどのように解釈するかで、読者の鑑賞が少々異なってくるようだ。筆者は、「…の」は半切れの働きをし

ていると解釈して読んだ。つまり素手の「蠅螂」を見てみると、武器の重さ故に「戦へず」いるわが身を遺憾に思っている、と解したのである。それとも中七座五の意味はおおきく捉えて人間界のことを言い当ているという解釈も成立するだろう。

蠅螂や子らの遊びに遊ばれし 糸井しるく

子供は虫に対して、時として残酷な態度をとる。それが猟奇的な、もしくはエスカレートしたものであるとしたら危険をはらんでいる。だが得てして好奇心の発露であったり、また「子ら」が死生観を学ぶことにも繋がるのである。掲句の場合は、より他愛もない状況を思い浮かべることができ、何にでも身構える「蠅螂」に興味を覚えた「子ら」が枝っ切れか何かで「蠅螂」を構っている景である。決して甚振っている訳ではないのである。

蠅螂のぬつと見てゐる雨の音 石関六弦

「見てゐる雨の音」なのか「見てゐる雨」なのか、が鍵である。むろん視覚的には「雨」を見ているのであるうけれども、「蠅螂」の様子から「音」を目で感じ取っているような様子を作者は感じたか、筆者は穿った読みを試みたのである。錯覚は、「蠅螂」なのか、作者なのか、はたまた筆者なのか。「ぬつと」は左右両角にある大きな複眼をよく表現している。

蠅螂や夜の孤独に鎌を折る 吉川拓真

他を寄せ付けないような構えを崩さない蠅螂も「夜」には

勝てないようなのである。そうして「孤独」に堪えているつもりで、自分自身に克てないようなのである。座五の「鎌折る」に読者は何を読み取るであろうか。読者に任ざれているとはいえ、「蠅螂」が「蠅螂」であることを辞めてしまうような気がしてならないのである。そして作者の意図は何処にあるのであろう。この句は作者の意図を鑑賞者に探求させずにはおかない。

円らな瞳しやいに構ふる祈り虫

河野はるみ

こちらの句は蠅螂への愛情が横溢している句である。作者は「祈り虫」を怖いと感じていないのである。「円らな」「しやい」からは「祈り虫」をむしろ可愛らしい存在として認めている。草緑色の、あるいは淡緑色の艶のある「祈り虫」を想像した。

甘言にかまきり鎌が下ろせない

篠崎紀子

この句の「かまきり」は人間が投影しているように筆者には思われてならない。かまきりが用心深いわけでも、疑り深いわけでもない。最近はお断のならない世の中なのである。この「かまきり」は「甘言」の何たるかを熟知しているようである。であるから身構えたままなのである。「甘言に下ろせない」の構図が読者にそう思わせるのである。何とも面白い、特異な言い回しである。

女蠅螂肘にバッグを持つ風情

森下山菜

上五は何と発音すればよいだろう。「をんなたうらう」も

しくは「をんなかまきり」であろうか。上五で切れるとして、エルメスやグッチの高級ブランドのバッグを肘に掛けているご婦人の姿を想像した。両脇を絞って身構えているポーズがそのままである。「蠅螂」からは細身の女性を想像するが、あの鎌にバッグを掛けているという発想はオリジナリティがある。

蠅螂を箒にのせて外に出す

元田亮一

子蠅螂なのかもしれない。その瞬間の作者の心の在り様が活写されている。ちよつとした瞬間に見付けた小かまきりを想定してみた。助詞を四力所使用しているので散文的な言い回しの印象が強く、また一句仕立てになつていたのである。どこかに切れを作るといふ方法もあったかもしれないが、むしろ作者の意図に依るものであろう。心象が深い分、淡々とした言い回しを選んだと推察した。

蠅螂や元より笑ふこと知らず

山戸美子

斧を構えたかたちと言ひ、逆三角形の面差しと言ひ、「蠅螂」そのものは、強面の風情であることは否めない。上五の「……や」の切れ字で季語と中七座五の句意の取り合わせの句であると解釈した。「知らず」の主語は誰であろうか？ 俳句鑑賞の常套では、作者ご自身なのだが、作者が観察している第三者ということも考えられないではない。

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎報
小林京子報

城跡に異界の気配大西日
自販機の缶茶カコンと西日中
看護士の言葉に癒ゆる夜の秋
電柱の影も貴重よ西日中
あぶな絵の裾合ひ照らす大西日
大海原の西日劈き護衛艦
大海へじゆわと音立て西日入る
大西日鳴き声細き養鶏場
遮断機の先頭に立つ大西日
西日落つ故郷はなほ土間に射し
聖堂に傾ぐ西日やパウロ像
西日濃し静まりかへる介護棟
雷鳴のわたる神護寺深渾し

マスミ
喜恵
順子
和子
卓郎
チアキ
京子
以上特選
徹平
稀香
はるみ
卓郎
亮一
マスミ

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄報

焦げ臭き西日を置いて宅配人
大西日の翳るを待ちて出るカフェ
休校の校舎燃えさう大西日
炎天下赤子護るは若きパパ
西日浴びのがるる術のなきポスト
米蔵から熊が顔出す大西日
眩しさや西日に染まる信号機
砂漠行く隊商の列大西日
磨かるる大黒柱盆用意
雲海の割れし底より街出づる
抱くといふより添ひ寝めく竹婦人
雲海の底に神話の岩戸座し
雲海や雌岳は薄き化粧して
望郷の端居に馴染む田舎酒

喜恵
由紀子
和子
和葉
順子
節代
チアキ
京子
昇報
雅夫
星歩
理恵
順子
萬蝶
昇

第四例会（浦和）

石井喜恵報
反町修報

白玉や絵地図に巡る花川戸
遠近に鳴る光る降るはたた神
雲海や馬の背越えをゆく行者
雲海の下餓死数万とガザの報
御師の宿目指す富嶽は雲海に
雲海や頂に立つ荒法師
雲海に溺れさうなる夜明けかな
山頂に一字の社雲の峰
風死すや白く粉を吹く亀の甲
国引きもかくや雲海流れ初む
浅間小浅間影の正しき今朝の秋
蛸や灯して暗き妻籠宿
謎多き宇宙誕生秋に入る
磯波の時には高し秋立つ日

以上特選
昇
萬蝶
順子
千祐
星歩
雅夫
理恵
康世
徹雄
昇
恵子
マスミ



落日の散華里山のかなかな
帆船の風待つ沖や今朝の秋

由紀子
喜 恵

水音の清しき朝白芙蓉
恋唄に咽ぶ胡弓や酔芙蓉
大文字果てし余情や古都の闇

佐江

虫干や昔商家の印半纏
あれこれと拾ひ読みする曝書かな
あれやこれ思ひを寄する土用干

慶子
詠子
はるみ

さはさとは笹の囁き今朝の秋
蝸や影ののびゆく慰霊の碑

以上特選
修

大方は隣家に傾ぎ芙蓉咲く
忘れたきことも託すや大文字
大文字照らす顔顔京の黙

以上特選

土用干書庫の小鍵をまづ探す
虫抔ひ干からびてゆく胸の内
賜りし「かな女の色紙」お風入れ

ひろこ
鶴城

ひぐらしの声降りそそぎ村暮るる
かなかなと杜の鈴緒ひきたれば

由紀子
翔太

大文字護摩木に思ひ書きさげず
一瞬の闇に吾子泣く大文字
幽玄や火の美しき大文字

夏野

虫干の蔵の暗さの怪しさや
虫干しや指折り数ふ子ら来る日
曝書せしかな女全集付箋多多

京子
星歩

手捻りの鉢のいびつや今朝の秋
カナカナに導びかれゆく杉並木

光子
延昭

芙蓉咲く十七代の菩提寺に
大文字護摩木に思ひ書きさげず
一瞬の闇に吾子泣く大文字

宣子

虫干の暗さの怪しさや
虫干しや指折り数ふ子ら来る日
曝書せしかな女全集付箋多多

千祐

立秋や朝の散歩のリード買ふ
足湯して夕蝸の奥信濃

行雄
曆文

大文字護摩木に思ひ書きさげず
一瞬の闇に吾子泣く大文字
幽玄や火の美しき大文字

はるみ

虫干の暗さの怪しさや
虫干しや指折り数ふ子ら来る日
曝書せしかな女全集付箋多多

マスミ

人声の登り行く磴かなかなかな
かなかなの鳴きやみ森の昏くなり

恵子
喜 恵

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

正木萬蝶
石田慶子

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

萬蝶
千春

晩節を凜と生きたし今朝の秋

マスミ

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

石田慶子

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

マスミ

第五例会 (浦和)

梅澤佐江
河野はるみ

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

石田慶子

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

マスミ

密やかに紅沁み出づる酔芙蓉
大文字恋の終はりを乗せて燃ゆ

夏野

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

星歩

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

マスミ

雑魚寝の宿に青春ありき大文字
夕されの風たをやかに酔芙蓉

千祐

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

鶴城

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

マスミ

遥拝の大文字の火や京の旅
ほそ道の出入口花芙蓉

宣子

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

京子

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

マスミ

地図を頼りに探す小路や大文字

はるみ
知子

虚子の資源ゴミ紫黄を虫抔
曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
虫干や秘仏も今日は端近に

以上特選
月を
稀香

虫干や改訂前の辞書に花
曝されし和尚の恋文と心経

マスミ

各地句会



浦の会 (浦和)

午前二時月下美人に会ひに行く
 女王花や令和の御代に通ひ婚
 灼熱の紅踊るフラメンコ
 熱風に雲動きけり大伽藍
 二駅を月下美人に逢はむとて
 両手には超大荷物帰省かな
 固唾呑み月下美人を見守る夜
 門柱のくろがね灼くる蝶番
 風灼けり野外労働禁止令
 月下美人のささやくや夢の刻

越後の会 (浦和)

山間の一村包む天の川
 腹さかれ命つなぎて鮭の雌
 深山の沢音軽し秋気澄む
 禽獣の待ち伏せ躲し鮭のぼる

小麦 風子 夕峰 寿夫 和子 さよ子 伸子 月を 京子 風舎

宣子 輝翠 真理 翔太

野ばらの会 (浦和)
 榛名富士借景にして大花野
 卓袱台は昭和の風情とろろ汁
 自然薯掘る腹這の兄一途なり
 大花野大波小波音のしつて
 しつば振り犬友を待つ恋花野
 珊瑚の会 (浦和)
 萩の風螺旋で登る展望台
 露座仏の指に秋蝶琥珀色
 何思ふ石の上なる秋の蝶
 萩の風紅を差さねば父に似て
 隠し湯に萩の声来る甲斐の家
 秋蝶と道行気取る脇往還
 発掘の土偶の破片萩の風
 萩の風わが身はいつも揺れどほし
 背中より老いゆく人や萩の風

秀子 栄子 茂子 夏江 みき子

病み上がりトロイメライや処暑の窓
 象るない動物園や処暑の風
 老いた猫尾花じやらせば仏面
 処暑雷雨さいたま市街渡りいく
 夕暮れて五弁をたたむ桔梗かな
 置き去りの太陽の塔残暑残暑
 処暑と言ひまだ処暑といふご挨拶
 青空と温度計睨む日がな処暑
 いつ割れし桔梗の風船音もなし

道代 尚己 真美子 莊志 和子 月を 樂 三茅 はるみ

新樹の会 (浦和)

八月の果てて白い齒黒い顔
 涼やかに影映す水八月尽
 八月果つ人も草木も再起動
 止まりたる巨大クレール秋暑し
 黒板の文字薄れをり八月尽
 神宿る巨木の老いや虫すだく
 柿の木塾 (浦和)
 終ひ風呂守宮の恋は硝子越し
 貯木場の丸太住処に守宮かな
 本殿を護る守宮の氏索性
 卵入りすいとん作る終戦日
 終戦日今も海底に日の丸機
 一人居の門限はなし守宮這ふ
 鳴くと云ふ守宮の声を聞きもらす

広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 昇 恵子 史代 節代

恵美子 章嘉 美津子 六弦 知子

節代 かつ子 和葉 章嘉 恵子 和子

風子 徹雄 道を 清吉 鶴城

芽吹句会 (浦和)

金継ぎの椀に白湯波む処暑の朝
淡々と辿る八十路や秋の空
深川庵に残る矢立よ照る芭蕉
電動ミル音軽やかに処暑の朝
爽快と竹林均す処暑の風
怪談はキャンプの夜のおまけかな
部屋隅に置かれし処暑の旅道具
残されし居間の広さや処暑来る

水明熊谷句会 (熊谷)

独房に馬追の声「朝は来」
初秋の風のくすぐる膝がしら
新秋や乗つてみたきは舳斗雲
初秋やことさら浅間うつくしく
天守より一望古墳群の初秋
孟秋や軍鶏のとさかの真赤赤
馬追の髭は風読むテレパシイ
ローソク岩に夕陽の灯る初秋かな
命久しや馬追の翔ぶ古墳塚
若楠句会 (浦和)
討論のつきぬ夜もあり青林檎
青林檎早熟なのは仕方なし
今朝の秋ただ静寂を包み进行

富子 千重子 弘子 千重子 千重子 久美子 ひろこ
徹平 卓郎 風子 秀子 道子 忠男 燈女 栄子 茂子
京子 慶子

風呂敷の包む新酒や一升瓶
早星さてはと見入る米の櫃
もぎたての青林檎の香ほとばしる
八朔の舞妓絵姿包装紙
温暖化喘ぐ地球や早星
早星亡き父母思ひ語り掛く
早星巨大クレールン黒黒と
渴望は命の肥やし早星
早星今日も訪ぬる無言館

芙蓉句会 (浦和)

古書店の本積み上げし片蔭り
片蔭りはや灼熱に席譲る
赤信号片蔭で待つ乳母車
櫛の会 (浦和)
吾亦紅気儘に揺れてひとりごと
デフリンピック手話の特訓処暑の夜
いい加減にしてと願ふよ処暑の空
人生の指南書に手ののびる処暑
足跡のときに寄り添ふ処暑の浜
省略を効かせずつきり吾亦紅

円卓の会 (浦和)

一寸の箸の權漕ぎ秋の川

楽 風舎 弘子 直子 葉子 久美子 真由美 鶴城 宏治 税子 仁子 美子 富子 文子 あつ子 朋子 裕誌 千重子 卓郎

玉虫や仏師の拝む光堂
日盛や仁王貌して鰐甲のこと
冷汁や父母のこと武甲のこと
日盛りや一番線に人あふれ
玉虫のなきがら動く玻璃の棚
夜の秋億シヨソ見上げる若夫婦
夏の川京へ漕ぎゆく一寸法師
まなぶたをいくつ閉ざして国は立つ
水団の味は変はず終戦忌
和歌山水明句会 (和歌山)

おむすびに砂が飛びつく土用東風
蟬時雨有線放送聞きとれず
ドライブの窓開け放つ青田道
出勤の時間を早め秋の雲
球児らの白き歯まぶし炎天下
亀強し猛暑の中の散歩かな
毛虫焼く美女は般若の面付けて
白蟻を見つけし大工几帳面
コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
油浮く残暑の午後の船溜り
雲海へ深く潜航ロープウェー
胸で聞く島人の唄仏桑花
髪一本顔にまつはる残暑かな
うすれゆく母の面影夕化粧
庚申塚に白粉花の群れて咲く

道太 翔太 月を 輝翠 京一 亮一 拓真 鶴城 和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 旭代 延昭 早都子 健司 洋子 俱子 由美子

戦跡に供花限りなき仏桑花

昇

秋旱ダム湖に鳥居見え隠れ

啓子

蝸に尋ねてみたし終活を

貴

神戸大池句会 (神戸)

千津子

地割れる米所の田秋旱
田にひびわれの地図を描たる秋旱

美智枝

はやばやと残暑見舞の届きけり
蝸やダムの水嵩案じをり

月を

六甲より大海原や晩夏光

早苗

秋旱地割れが続く川の底
盃を単孤の我や新酒酌む

公子

かなかなの繰り言しかと聞いてやる

喜夫

寄居虫のもぬけの殻に晩夏光

早苗

秋風をはらみ単車の彼来る

美子

水明濁つくし句会 (大阪)

稀香

若狭水明会 (若狭)

寛久

鶴川山百合句会 (鶴川)

雄二郎

反核や天体直列原爆忌

智恵子

激辛のラーメンに汗太鼓腹

友夏

雷光に寝姿見せし赤城山

史代

木権忌や菜をぼつちり手塩皿

人美

戦争はいやじやあいやじやあ蟬の声

自然

遠雷やふつつつ恋の芽生えたり

史代

八月や公立勝てぬ甲子園

ノルン

耐へ切れぬ渴きを癒す大夕立

祥子

遠雷をはや捉へたる犬の耳

広子

外国語数多鴨川床料理

洋子

熱り立つ土の匂ひや夕立あと

保人

迅雷や寺の楠真つ二つ

千春

ミモザの会 (横浜)

万蝶

農耕の父の生涯深山蟬

風花

筑波嶺や女岳を庇ふはたた神

萬蝶

七月分

万蝶

野仏の総身を洗ふ夕立かな

和風

いかづちや走る道着のをの子たち

理恵

でで虫のゆるやかロッククライマー

玲子

初蟬や唐突に来てひと鳴きす

初花

正座して聞く遠雷と父の雷

うさぎ

引越は我が身一つよ蝸牛

亜弥子

くるくると回す鉛筆扇風機

ことば

雷鳴や九谷焼の縁の濃さ

まどか

誰にでも善と悪あり半夏生

詠子

夕立の過ぐるや土の匂ひして

昭代

雷鳴や九谷焼の縁の濃さ

玲子

割り箸で探す葉裏や蝸牛

栄子

夕立や古い跳ね返す名台詞

笑風

一塩に踊る秋刀魚や煙立つ

真

下町のご隠居集ふ片かげり

慶子

夕立や部屋うす暗さ母の留守

郁子

ひぐらしのこゑに溺るる夕まぐれ

香音子

古里の朽ちし表札かたつむり

史代

ラジオより敗戦の報蟬時雨

桂子

紫黄が叫ぶ月をよく来た猿酒やれ

ひとみ

蝸牛行きつく場所がゴールかな

千春

秋早葉物少なし子の弁当

美紗子

幽霊が二の足を踏む残暑かな

芳春

八月分

史代

秋早街路樹枯れて陰少な

洋子

蝸やかな女の句碑に鳴きはじむ

秀子

白百日紅行きより帰り胸にしむ

史代

缶ビールピーナツをそへ門火焚く
盆踊り輪の中心は婦人会
送り火や隣のは何思ふ

重弥子
栄子
由美子

地中に居れ出たら干物ぞ蚯蚓たち
エマニエル老ゆ藤椅子のきしみをり
送り火の消えて暫しの静寂かな

美千子
萬蝶
玲子

黙祷や今日も変はらぬ蟬時雨
送り火や「お気をつけて」と娘言ふ
送り火をまたの逢瀬のために焚く

詠子
慶子
千春

離の会（浦和）

かなかなや旅の終りのバスを待つ
黙もまた返事のひとつかなかなかな
大声で人を呼びたき利根新涼
粥する若僧の背にかなかなや
笠の端の美しき横顔風の盆
蜩の鳴き止み里に終バス来
蜩の心に沁むる日暮かな
星月夜美濃の封書の草書文字

公子
喜恵
燈女
輝翠
桂子
はるみ
チアキ
佐江

☆ ☆

昔話あれこれ 51

義孝の遺児行成、 俊賢の推挙で世に出る

天下の能筆家と評判の行成卿は後少将
義孝の遺児である。

この行成が備後介といつて昇殿出来ぬ
身分の時、蔵人の頭に引き立てられた。
大変珍しいことである。

それは、源俊賢（源高明の子、道長の妻
明子の兄）が自分の後任として、誰が良い
か一条天皇からご下問があった時、「行成
ほど蔵人頭にふさわしい人物はおりませ
ん。能力もあり、立派な人物です。」と申
し上げた。

天皇が「彼はまだ官位が低いがどうだろ
う」とおっしゃると、俊賢は、
「現在の官位の低さなどお気になさる必
要はございません。このように優れた人
材をお見分けにならないのは、世のため
によろしくございません。君主が善悪を
弁えておいでになればこそ、臣下も仕事
に励むのです。」と進言し、行成は蔵人頭
になった。

行成、歌道を除けば、多芸多能

行成卿は、和歌だけは不得手であつた
ようであるが、何でも出来る人であつた。
後一条天皇がまだ幼かつた頃、人々に
「玩具が欲しいな」とおっしゃつたので、
人々は黄金・銀を散りばめて意匠を凝ら
した玩具など献上したが、行成卿は独楽
に濃淡に染めた紐を付けて献上した。幼
い帝

「これは何なの」と尋ねられたので、
「廻してごらんあそばせ。面白いですよ」と
申し上げた。帝は南殿に出て廻してみ
ると広い南殿の中をぐるぐると廻つたの
で、すっかり楽しくなつて、他の玩具に
は見向きもしなかつた。

また、一条天皇の殿上人たちが扇を献
上した時、他の人々は、扇の骨や紙に趣
向を凝らし、その上に描く絵や歌などに
もいろいろ工夫したものを献上したが、
行成卿は骨に漆を綺麗に塗り、中国渡来
の紙に下絵をほのかに描いたものの上
に、表には楷書で端正に裏には草書で楽
府」を書いて献上した。

帝は、この扇の表と裏をかわるがわる
眺め、御手箱に入れて宝物にしたとい
う。

（つづく）

第9回「水明塾」のご案内

【日 時】 2025年11月29日（土曜日）

◆ 午前の部 10:00～12:30（9:30受付）

全句講評講座（対象：水明集作家）

（事前投句：当期雑詠1句）

◆ 午後の部 14:00～16:00（13:30受付）

講演（対象：水明全誌友、同人、季音同人）

・講師：佐怒賀正美氏（現代俳句協会副会長、
「秋」主宰）

・演題：「俳句の豊かさ～恩師から学んだもの」

【会 場】 さいたま共済会館 501・502（5階）

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町7丁目5-14

【会 費】 午前の部1,000円、午後の部2,000円

【申 込】 11月号に添付の申込書に会費を添えて11月20日（木）

までに発行所総務部へお申し込み下さい。

※午前の部の「全句講評講座」の受講者は申し込みと一緒に
当季雑詠1句を投句して下さい。

※昼食はありません。昼食、飲み物は各自で持参して下さい。

※申し込みの無い方は入場できません。

※状況によっては、内容を変更する場合があります。

事業部

水明俳句会 誌代・同人費・季音同人費の納付 及び 水明発展基金へのご寄付のお願い

水明俳句会 会員の皆さまには平素から格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

また、先般行われました、水明創刊 95 周年記念全国大会及び祝賀会に対しましても多数の皆さまの大会兼題句へのご投句や大会、祝賀会へのご参加を頂き誠に有難うございました。

お蔭様にて、滞りなく終了することが出来ました。

さて、今年も残り少なくなってまいりました。

今月号には、「水明誌代並びに同人費・季音同人費」の郵便振替依頼書に加え「水明発展基金」への郵便振替依頼書を同封させていただきました。

いつも申し上げておりますが、水明俳句会の運営は皆さまからお支払いいただく誌代・同人費・季音同人費だけでは賅えずに、水明発展基金からの支援金によって成り立っております。

今回は水明創刊 95 周年記念事業として「長谷川かな女の百句」を会員の皆さまやご関係先に贈呈させていただいたほか、95 周年記念特別作品の表彰や功労賞の授与などに発展基金の資金を使わせていただきました。

会員の皆さまにおかれましても、時節柄何かと物入りの事とは存じますが、従来に引き続き今後とも誌代・同人費・季音同人費のご納付とともに、水明発展基金にも格別のご高配を賜りますよう、重ねてお願い申し上げる次第です。

最後になりますが、会員の皆さま方の益々のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

水明俳句会

主宰 山本 鬼之介
総務部長 日高 道を

水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和七年九月三十日現在 —

鈴木貴水	10	山口	染谷風子	1	山口
嶋田洋子	5	山口	飛永 鼓	1	山口
西浦千枝子	10	山口	日高道を	5	山口
全国大会より			日吉亜弥子	10	山口
荒井俱子	1	山口	福田千春	5	山口
石井喜恵	2	山口	正木萬蝶	3	山口
石川理恵	5	山口	町野広子	1	山口
石田慶子	1	山口	丸山マスミ	2	山口
井上燈女	3	山口	皆川更穂	3	山口
梅澤佐江	2	山口	茂木和一	3	山口
大塚茂子	2	山口	元田亮一	10	山口
岡田宣子	2	山口	本橋稀香	1	山口
緒方みき子	2	山口	森 和子	1	山口
河野はるみ	2	山口	— 合計 —	105	山口
越田栄子	2	山口			
島津初花	5	山口			
下川光子	2	山口			
鈴木玲子	3	山口			

水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和七年八月三十一日現在 —

阿部幸代	2	山口
山本鬼之介	50	山口
佐々木史女	10	山口
瀬戸雄二郎	10	山口
新 曆文	5.5	山口
— 合計 —	77.5	山口

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
- [作品] 5句 [受講料] 1,000円
- [方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
- [送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

風 声

○現代俳句八月号——第二回現代俳句「風を詠む」欄

天つ風夏めく雲の脚疾し

秋谷風舎

通訳のいらぬ鳥語や明易き

池田雅夫

万緑と長谷の大仏相照らす

大塚茂子

病葉の一葉を浮かす水鏡

越田栄子

滑走路世界知りたき臺

近藤徹平

御陣乗太鼓鬼が指差す出水あと

渋谷きいち

自分史に空事少し恋螢

染谷風子

大梁よりどすんと落つる屋敷蛇

丸山マシミ

鉄臭き線路沿線草いきれ

鳥津初花

紫陽花や刺身分厚き浜の宿

鳥羽和風

○現代俳句八月号——「風を詠む」秀句を探る」欄

小松敦氏の感銘八句抄に

紫陽花や刺身分厚き浜の宿

鳥羽和風

○現代俳句九月号——「現代俳句年鑑2025を読む」欄

鳥居厚子感銘の一句に

冬の月流離ふ雲に姿消す

野平美紗子

「流離ふ雲」のフレーズに魅かれた。

月は何処へ落ち着くのであろうか。雲間を淡くこぼれる光、月も雲もいのちあるもののように見え隠れする景が浮かぶ。

果てしない宇宙のロマンを想像させられる。月と雲の取り合せが、味わい深く心に残る一句。静かな佇まいに共感し

ている。

高井元一氏の感銘十句抄に

石垣に雪の名残や舟下り

野村美子

井澤秀峰氏の感銘十句抄に

子の部屋は子の時のまま鬼やらひ

檜鼻ことは

○現代俳句九月号——第二回現代俳句「風を詠む」欄

月代の石段見ゆる連子窓

菊池ひろこ

西の京駅のベンチの捨扇

池田珪子

今日の月シャチのジャンプと重なりぬ

小駒さち子

奇人住む木戸に絡まる烏瓜

小林京子

ひっそりと城下を落つる鮎の影

五明昇

マドンナに偶ひてときめく秋祭

反町修

けらつき般若の面を打つ姫

原田秀子

水澄みて湖面にしんと山を置く

本橋稀香

○天塚（宮城昌代主宰）九月号——「十誌の珠玉」欄

みどり濃き窓辺にこそこのノクターン

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）八月号——「受贈俳誌美術館」欄

月涼しアイヌ民族衣装館

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）九月号——「受贈俳誌美術館」欄

番町のとある画廊の夏灯

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）九月号——「受贈誌拝見」欄

夏めくや剣士が厚き胸を拭く

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）八月号——「受贈誌御礼」欄

春興や劇中劇に蝶が舞ふ 鬼之介

○駒草（西山陸主宰）九月号——「句誌巡り」欄

木脇祐貴氏による鑑賞で

春雷に念を押さるる戻り道 鬼之介

襟元にときめき秘めて春の服

一句目。訪問先を出る時に「お気をつけて」と言われた。

春雷が遠くで鳴ってゐる。改めて気が引き締まるのである。

二句目。春になって明るい感じの服を着てみた。今日行く

ところ、会う人の事を思うと少し胸がときめくのである。

○こんちえると（関根道豊版元）八月号——「受贈誌紙お礼」欄

夕顔が悪しき噂を消し去りぬ 鬼之介

約束は生きてゐること薔薇香る 松井由紀子

玉葱や夫婦別姓とはゆかず 石山かつ子

ひとりぼつちの空は鈍色なめくじり 青木鶴城

古古古米古古米古古米芒種の日 福田千春

○菜の花（伊藤政美主宰）八月号——「諸家近詠」欄

手鏡の光の合図めかり時 鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）九月号——「諸家近詠」欄

水亭や江差追分切せつと 鬼之介

○笈（山本一步主宰）八月号——「受贈誌の一句」欄

ちやぶだいはいつも真ん中桃の花 森下山菜

○笈（山本一步主宰）九月号——「受贈誌の一句」欄

麦笛やふる里と云ふ知らぬ町 森下山菜

（日高道を抄出）

俳句四季新人賞
受賞記念作品20句

山海和紀

俳句四季新人奨励賞
受賞記念作品20句

有瀬こうこ

田中木江

新人賞最終候補者
競詠5句

【巻頭三句】

伊藤伊那男／江崎紀和子

小杉伸一路／屋内修一

松岡隆子／伊藤嬰子

【今月の筆】

柴田鏡子／山下幸典

織田亮太郎＋千種創一

【人と作品】

衣川次郎『葱の青』

【今月のハイライト】

「花鳥」「白魚火」

「にん」「羅」「むさし野」

重陽の節句吟行記

井上弘美

【好評連載】

成瀬政博
とりあえずの日々

筑紫磐井

非禮既而

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手廻り、
俳人の書き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

橋本喜夫

俳句のレトリック

神作研一

てのひらの江戸
—古奥籍を詠する

藤村公洋

俳句のつみみ

秘矢まりえ

諸家書架

石井隆司

たもとむる
俳句よもやま話

二ノ宮二雄
一筆百里

俳句四季
Haika Shiki

2025年12月号

11月20日発売
定価1100円（税込）

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

後記

九・十月合併号でしたので、今月号にて、全国大会の追加をお届けします。

全国大会当日は兼題句の入選発表があり、主宰の講評を頂きました。本号では当日発表できなかった佳作まで、主宰の選を掲載しました。

以前お配りした全国大会の全投句表は、皆様の投句のままを原則としていますが、本号の選句は送り仮名等を、主宰が直されたり編集部で直したりしている場合がありますので、ご了承下さい。

九十五周年ですので、祝賀会に大勢のご来賓をお招きしました。高野ムツオ、後藤章、杉本青三郎、稲田暉子、池田澄子、石川一郎、西井洋子、上野佐緒、寺田敬子、松本佳子、爲永憲司、山岡喜美子、小出菜津子の各氏です。これらの方々が、記念大会と祝賀会の間にお見え下さり、水明の

会員と写真撮影して下さいました。当号に写真を他の写真と共に掲載しましたので、ご覧下さいませ。

当日は遠路はるばる関西から森本早苗氏、若狭から島津初花・鳥羽和風・檜鼻ことは・飛永鼓・原田自然・松宮保人氏がご参加下さいました。

詳しくは本号三二頁の青木鶴城氏の記事をお読み下さいませ。

ふらんす堂・「水明」創立95周年祝賀会。スマートフォンを検索すると祝賀会当日の楽しさがありありと伝わります。主宰のご挨拶から、はじまって当日の祝賀会の様子が全て分かります。

全員の写真もしっかり写っていますので、どうぞご覧下さい。今年は例年より一カ月も早くインフルエンザが流行しているようです。

こここのところ寒暖差が大きいので、インフルエンザ患者が昨年の倍とか、どうぞお気をつけて。

(節代)

今月のはてな？

- 薯蕷汁(どろろじる)
- 拉(ひしゃ)げし
- 単孤(たんこ)
- 枇(しいな)
- 悉皆屋(しつかいや)
- 桷(ずみ)
- 白耳義(ベルギー)
- 四暗刻(スーアンコー)
- 分藥(ぶんげつ)
- 無漏路(むろじ)
- 六道四生(ろくどうししょう)
- 甜瓜(まくわうり)
- 劈(つんざ)き

86 ♪ 74 ♪ 64 59 46 44 39 25 24 12 4 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内をお願いします。)

水明

令和七年十一月号

通巻一一四二号

令和七年十一月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

季音抄

山本鬼之介

落日へ散華里山のかなか
休校の校舎燃えさう大西日
寺井汲む隅ずみまでも鳳仙花
星祭ためらはず書く「逢ひたし」と
ひとり飲むワイン皆既の月の色
一様に竹林撓ふ野分の来
夏草や嘗てこの地に大本営
風入れて泥大島の媚態かな
恋唄に咽ぶ胡弓や酔芙蓉
雲海の底に神話の岩戸座し
そのままを湖に映せし盆の月
虫干や秘仏も今日は端近に
晩照の島へと泳ぎゆく少年
秋風や絵の削れゆく絵蠟燭
蝸のこゑ遠くなりさやうなら
いつの間に独りとなりし夕端居
跳ねたれば街も跳ねたる佞武多の夜
サン格拉斯かつて焼跡闇市派

松井由紀子
茂木和子
森川義子
森本早苗
山中みどり
網野月を
日高道を
正木萬蝶
梅澤佐江
大場順子
松宮保人
丸山マシミ
保坂翔太
横山君夫
下川光子
笹本啓子
渋谷さいち
染谷風子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

手放せぬ本を手厚く曝書せり
 本郷に残る旅館の作り滝
 曝書する昭和レトロの「火の鳥」を
 山間の一村包む天の川
 蝸牛ゆるり進めば海の見ゆ
 神鳴や両面打ちの大太鼓
 時の間の風にこぼるる稲の花
 天領でありし薨や秋祭
 尾を残し足取り軽く蜥蜴の子
 火の色に染まりゆく街佞武多来る
 笥迫の朱色きりと六月の婚
 日の盛鬪牛告ぐるファンファーレ
 どこまでも同じ金魚を狙ふばい
 かなかなの時折揃ふ城の址
 お代はりと母に差し出す帰省かな
 家犬の上座に臥する大暑かな
 夫婦喧嘩をビールの泡の希釈せり
 盆踊り輪の中心は婦人会

丸屋詠子
 小林京子
 倉田星歩
 岡田宣子
 菅原真理
 皆川更穂
 岡本祥子
 田中弘子
 寺町知子
 霜多光代
 阿部幸代
 反町修
 本橋稀香
 石関六弦
 元田亮一
 秋谷風舎
 飯田忠男
 畑宮栄子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗